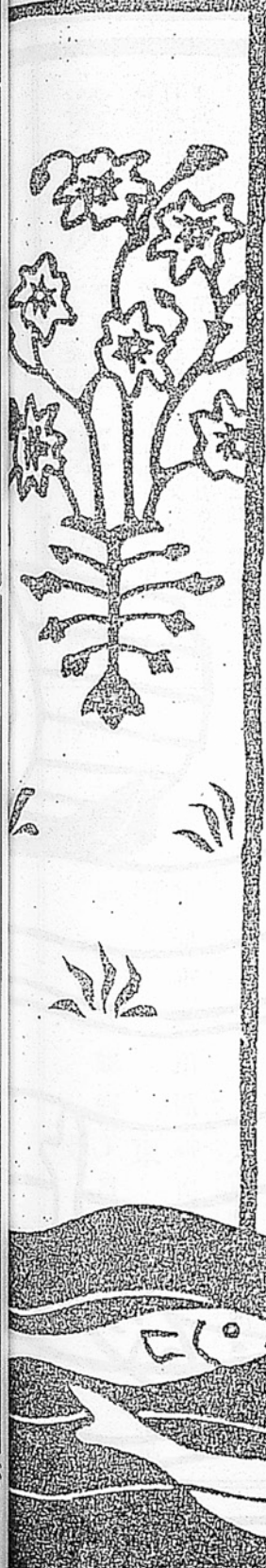


寄贈



# 求道

第一卷  
第十號



## 求道第一卷第十一號

目次

|                  |       |
|------------------|-------|
| ◎自然法爾は信仰圓熟の極致也   | 〔社説〕  |
| ◎女子教育につきて        | 和田鼎   |
| ◎喜愛心             | 近角常觀  |
| ◎苦悶救済の實驗と余か信仰の告白 | 佐々木哲郎 |
| ◎宗教は自覺なり         | 求道學人  |
| ◎友に與ふる書          | 鶴田耿介  |
| ◎逆境か順境か          | 百目木劍虹 |
| ▲愛と慈悲<br>風尚餘韻    | 珉々    |
| ◎回顧の賦            | 木曾紫光  |
| ◎雜吟              | 甲之    |
| ◎經文に見えたる樂器       | 志水文雄  |
| ▲新刊紹介<br>政教時報    |       |
| ◎編輯だより◎第二求道會記事   | 吉澤露門  |
| ◎絶對の戒律           |       |

月影の常にすむなる山の端を

隔つる雲のなからましかば

いる月を見るとや人は思ふらむ

心をかけて西にむかへば

夢さめてその暁をまつほどの

やみをもてらせかりの燈火

千年まで結びし水も露ばかり

我身の爲めと思ひやはせし

はかなくぞみよの佛と思ひける

我か身一つにありと知らずて

すめば見ゆ濁ればかくる定めなき

此身や水にやとる月影

潔き池にかけこそうかびぬれ

沈みやせむと思ふ我か身を

\* \* \* \* \*

藤原國房

堀川入道右大臣

藤原教家朝臣

僧 那 覺 燧

前參議教長

宮内卿永範

神祇伯頭仲

求 道

第一卷 第十一號

自然法爾は信仰圓熟の極致也

親○戀○聖○人○晚○年○に○及○び○信○仰○圓○熟○の○境○に○達○し○、孔○子○が○所○謂○七○十○に○し○て○心○の○欲○す○る○所○に○從○へ○ど○も○規○を○越○へ○ざ○る○の○域○に○及○び○、常○に○法○を○説○き○て○宣○く○、自○然○法○爾○義○な○さ○を○義○と○す○と○信○知○す○べ○し○と○、蓋○し○其○意○義○深○遠○に○し○て○吾○人○容○易○に○其○境○を○窺○ふ○能○は○ず○と○雖○、蓋○し○是○れ○人○生○に○し○て○其○理○想○と○合○し○、其○行○ふ○所○、其○考○ふ○る○所○、皆○佛○天○の○指○示○す○る○所○と○一○致○し○て○、益○々○佛○陀○境○界○の○不○可○思○議○な○る○に○仰○嘆○し○て○、言○語○道○斷○へ○て○、心○行○滅○す○る○所○、遂○に○自○然○法○爾○の○四○字○を○以○て○讚○嘆○し○玉○ひ○。又○先○師○の○義○な○さ○を○義○と○す○と○い○へ○る○金○言○を○反○覆○し○て○、其○餘○韻○の○嬌○々○た○る○も○の○ある○を○味○ひ○玉○ふ○に○あ○ら○ざ○ら○む○や○。吾○人○常○に○人○生○に○於○け○る○最○終○の○問○題○に○接○す○る○や○、心○中○奥○底○に○嘔○き○て○曰○く○。自○然○法○爾○義○な○さ○を○義○と○せ○よ○と○、忽○に○し○て○渙○然○と○し○て○氷○の○日○に○解○く○る○が○如○し○。吾○人○人○生○に○於○て○常○に○意○外○な○る○奇○蹟○を○見○聞○し○、不○可○思○議○な○る○事○實○を○實○験○す○。心○中○忽○ち○に○し○て○頷○き○て○曰○く○。自○然○法○爾○義○な○さ○を○義○と○す○と○は○、此○の○如○さ○の○靈○境○な○ら○く○の○み○と○。其○他○百○千○無○量○の○場○合○に○於○て○百○千○無○量○の○意○義○を○持○來○た○し○て○、吾○人○に○絶○對○の○偉○大○な○る○力○を○得○せ○し○め○玉○ふ○德○音○は○、洵○に○自○然○法○爾○の○文○字○な○る○か○な○。自○然○法○爾○、文○字○既○に○力○を○用○ぬ○ざ○る○を○示○す○。而○し○て○其○意○義○た○る○や○、絶○對○の○力○を○顯○は○し○來○り○て○一○切○萬○物○其○規○道○の○下○に○動○く○こ○と○恰○も○水○の○低○さ○に○附○き○、石○の○下○に○墜○つ○る○の○自○然○な○る○が○如○く○、花○咲○き○鳥○歌○ふ○の○法○爾○た○る○が○如○く○な○る○を○想○起○せ○し○む○。蓋○し○是○れ○自○然○法○爾○、力○を○用○ぬ○ず○し○て○最○も○力○の○顯○は○れ○た○る○も○の○た○ら○ず○む○は○あ○ら○ず○。世○の○偉○大○な○る○力○と○稱○し○、驚○く○べ○き○力○と○嘆○す○る○所○以○の○者○、某○々○二○三○の○事○實○が○他○の○平○々○凡○々○た○る○事○實○に○比○し○て○、著○し○き○場○合○に○發○す○る○の○言○語○の○み○。此○の○如○さ○は○人○生○相○對○の○境○界○に○於○て○目○を○驚○か○し○む○と○言○へ○る○の○み○。然○れ○ど○も○若○し○絶○對○の○靈○境○を○仰○く○と○き○は○天○下○の○事○物○何○物○か○此○驚○く○へ○き○力○を○蒙○ら○さ○る○も○の○や○あ○る○。稱○し○て○奇○蹟○と○云○ひ○、不○可○思○議○と○嘆○す○、是○れ○人○生○の○標○準○よ○り○し○て○言○へ○る○の○言○な○ら○く○の○み○。若○し○首○を○回○ら○し○て○四○方○を○顧○る○、愕○然○と○し○て○嘆○す○ら○く○、嗚○呼

人生は皆奇蹟也、皆不可思議也と。而して其靈境たるや、皆佛陀大悲の淵源より發動せざるものなし。此に於てや、某々二三の事實のみに非ずして、人生に於ける凡てが此偉大なる力の範圍已外に逸せざるものなきを發見せむ。此に於てや、自然法爾、最も力を用ゐざる言語は絶對の力を顯はすの言語となれり。親鸞聖人年八十八自ら其多年の實驗を以て其圓熟せる靈境を圓滿なる靈筆を以て親切に吾人に解き教へて宜はく、自然といふは自はものづからといふ、行者のはからひにあらざる。然といふはしからじむといふことばなり。しからじむといふは行者のはからひにあらざる、如來のちかひにてあるがゆへに法爾といふ。法爾といふはこの如來の御ちかひなるがゆへにしからじむといふなり。すべて人のはじめてはからはざるなり。このゆへに義なのはからひのなきをもてこの法の徳のゆへにしからじむといふなり。況んや其意義醇熟人をして坐るに如來の光明の中に醉はしめむとするものあり。而して若し訓詁を以て論ずれば最も不自然たる解釋たるにも拘はらず、其信念の發動に至りては法爾として萬徳圓備の靈境眼前に髣髴たるを感ぜずむばあらず。洵に自然法爾なる文字を以て自然法爾の境界を自然法爾の事實を以て教へ玉ひしものと鑽仰すべし也。

親鸞聖人信卷の末に於て信心歡喜の實感を披瀝して、遂に現生十種の利益を數へ玉へり。皆是自然法爾の徳たらざるなし。蓋し是れ聖人が多年の實驗の結晶凝結したる成産たらずむばあらず。吾人常に聖人の人格を追慕して、叨りに聖人の實驗を追想す。而して自ら以爲らく、我聖人の味ひ玉ひし靈境を窺ふを得たりと。而して後實驗を深むるに及びて、遽然として願みて獨り自ら前日の實驗の淺薄たりしを慚ぢざるなし。吾人過去を顧みて將來を想像するときは聖人の實驗の泉が如何に深遠なるかは知るべからず。宜哉是れ聖人滿九十歳に於ける信仰の實驗なるをや。況んや是大悲の淵源より汲み玉へるに於てをや。七百年間滾々として盡きざるもの決して故なきにあらざる也。而して其流や益長へにして盡きざる所以のものは、聖人本來自然法爾に任せて力を用ゐて故意に開鑿し玉はざりしに淵源せずむばあらず。此の如き聖人の實驗は吾人の能く測る所ならむや。固より信仰の味に至りて同一鹹味所謂品位階次なしと雖、其信仰已後の修養の到れる髣髴として佛陀に咫尺し、融々として靈

界の間に翱翔するの靈境に至りては吾人豈聖人が廣廓なる心中を羨慕し奉らずむばあらず。彼の現生十種の益の如き吾人の短き實驗によりて之を徴するも、意其義の深長なる言ふべからず。請ふ之を信仰の實例に徴せむか。信仰の人は軍中刀火の間に於て敵難を免れ、獄中桎梏自ら期せずして釋然として解脱を得たり。豈是眞衆護持の益にあらざるや。況んや、天神地祇日月星辰は無碍の一道の人を護持養育し玉ふに於てをや。又念佛の人は自ら其理由を知らずして心自ら和融し、病あるの人も苦に堪へざるの人も期せずして遂に一大光明に接せり。況んや信仰已後の經驗に於て、現世の幸福期せずして來り、人生の調和忽ちにして成る、是豈至徳具足の益にあらざるや。信仰は實に内心の革命也、精神の改造也。不眞面目なるの人は一變して眞摯の人となり、輕佻なるの人は忽ちにして謹嚴なる人格となる。劍を執りて親を辱したる人も、死に臨みて其罪を悔み、酒色に沈溺したるものも翻然として其本心に復る。是豈轉惡成善の益にあらざるや。佛陀の智慧は疑りて文殊の人格と化し、如來の慈悲は鍾りて觀音の妙力を現す。而して此の如き佛菩薩常に吾人信佛の徒を護念し玉ふこと恰も母の子を護念するが如けむのみ。吾人屢其引導を蒙る、聖人が我二菩薩の引導に順じて如來の本願を弘むるに在りと斷言し玉ひし如き、如何に佛境に圓融し、靈界と道交し玉ひしかを想はずむばあらず。是豈諸佛護念の益にあらざるや。既に此の如く諸佛菩薩に咫尺す。諸佛菩薩信佛傳法の行爲を觀そなはして、稱讚の聲を放ち玉はざらむや。化身土卷の眞衆護持に於て聖人の實感を味ひ奉るの人は、亦阿彌陀經の六方恒沙の諸佛の證誠稱讚の猶偉大なる靈感を蒙らざることやある。廣長の舌相を出して普く三千大千世界を覆ふといふ何ぞ其思想の廣大なる。而して吾人其形容の大なるに驚きて其事實の人生の上に實現するを悟らず、世の所謂奇蹟といひ、不可思議といふが如き、皆是人生の上に示し玉ひし諸佛の證誠にあらざるや。若し現世の利益を蒙りて法に入れるの人は、利益を得たるが爲にあらざるして、法の徳の然らしむるの偉大なるに感泣すれば也。況んや、一佛の化する所は一切佛の化する所、一佛の満足し玉ふ所は一切佛の満足し玉ふ所。諸佛は同體の大悲にして、菩薩法臣一に本地法王の慈悲を傳ふるの満足なるに於てをや。吾人近時最も不可思議に堪へざるは、佛教各宗に於ける敬虔なる信念が唯一の佛陀を中心として絶對他力の安住に歸一するに在り。或は覺鑿上人の信仰を味ひ、或は慈雲尊者の人格を尊崇し、或は日蓮宗の僧にして十界三千自ら心を苦むるのみな

るを實驗して直ちに如來の大悲に泣く。而して自ら所信を説きて醇々として郷黨を感化し、同輩の攻撃に對して少しも痛痒を感ぜず。是れ眞個に日蓮の徒、地下の上人其髓を得たるを嘉し玉ふべし。且つ嘗て基督教に教育を受けたるの人、子の早世によりて佛陀の引接を感じ、又其信仰に經驗あるの人佛陀大慈の廣懷を味ひて無上の安慰を享くるか如き、諸佛菩薩各宗各派滔々として大海に流れ來ること、所謂溜瀦の一味なるが如き傾向を示し來る。吾人は遂に佛智海の混濛汗汗として邊涯なきに仰嘆せずば、あらざる也。吾人日常の生活を顧る、忽ちにして瞋恚の炎に焼かれ、時として貪慾の水に溺る。幸に攝取の光明ありて大悲憐むことなくして我を照し玉ふ。聖人嘆じて曰く。攝取の心光は常に照護し玉ふ。既に能く無明の闇を破ると雖、貪愛瞋憎の雲霧常に眞實信心の天に覆へり。譬へば日光の雲霧に蔽はるれども雲霧の下明らかにして闇なきが如しと。實に是れ信仰生活の要點也。我雲を排せむとす、雲霧に閉ぢて開かず、唯大悲を仰げば雲自ら開きて親しく佛日を拜す。親しく佛日を拜して他人に對す、他人亦雲を開きて共に慈光に浴す。是豈心光常護の益にあらずや。夫れ信心開發の時刻の來る遂に測るべからず。恰も天地一時に破壊し去りて世界光明を以て満たさるゝが如し。多年の無明忽ち破れ去りて胸臆に湧き來るものは歡喜の靈泉にして、口に溢るゝものは感謝の念佛なりけり。山は是れ昨日の山、道は是れ昔日の道。而して山色喜びて吾を迎ふるが如く、道亦自ら新なるに似たり。所謂身心悅豫の境に在り、是豈心多歡喜の益にあらずや。抑々信仰に達せざる生活は義務の生活也、苦行の生活也、自力の生活也、贖罪の生活也。而して忽ちにして此の如き大安慰を得たり、何を以てか佛恩に報ひ師德に報ぜむや。冀くは後半生を捧げて佛陀の慈悲を傳へむかな。我若し此の如き光明に遇はずはたしかに我は煩悶に死せむ、我若し假りに煩悶に死せりとせむか、何ぞ今日の生活あらむや、身を粉にするも以て苦しみとするに足らず、骨を摧く豈辭する所ならむや。嘗て墮獄の苦を恐れて悶絕僻地せし阿闍世王が、諸の衆生の爲に無量劫の間阿鼻地獄に墮して無量の苦を受くるも苦とせずと云ふ。此の如きの至情是豈知恩報德の益にあらずや。既に此心あり苦悶の人を見て坐視するに忍びむや。乃ち就きて經驗を語りて之を慰藉し、窮厄の人あり、覺へず起ちて其苦を分つ。蓋し吾人人生に於ける僅かに五十年、晝夜人を度し貧を恤はして寸暇なからしむるも之を佛陀の大悲に比す、大海の一滴にだも如かず。吾人眞個に慈悲を行ふは一たび樂土に

入りて生死園林に遊戯する時にあり。然れども此の如き大悲悲を行はしむるの心は即ち吾人が現在、心中に於て佛陀の大慈悲心を感じたる眞實信心の泉より流れ出づるものならずはあらず。故に若し吾人其信仰の泉を味へば身心に溢るゝものは慈悲の心水なり。之に接し之に交るもの豈其德澤に濕はざるものあらむや。吾人自ら法を説く、佛陀に面接して語るの感あり。聽く人亦直接佛陀の光明に接す。突如として吾我に復る。自ら顧みて何か故にかくの如き結果を來すかを知るべからず。如來の御催に預りて念佛申し候人を我弟子と申すこと極めたる荒涼の事なりの聖訓洵に適切なり。是れ畢竟肉體を透して佛陀が其慈悲の力を現したまふものに外ならず。是豈常行大悲の益にあらずや。既に此の如き境に達す、身は是れ肉の一塊、然れども心は既に如來に咫尺し奉る。華嚴經に信心觀喜するものは諸の如來と等しといひ、涅槃經に大信心は佛性なり、佛性即ち如來なりといふもの實に此境にあらずや。大經に彌勒の如しといひ、觀經に觀世音大勢至勝友となるといひ、釋尊嘆して我善親友なり芬陀利華也との玉ふ。親慈聖人晩年に及びて此感最も深かりけむ。常に其靈境を嘆じ玉ふ。和讃に曰く。超世の悲願さしより我等は生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねど、心は淨土に棲み遊ぶと。是入正定聚の益にあらずや。

已上現生十種の靈感の如き皆期せずして自ら來り、望まざるに自ら與へらるゝもの、これ皆自然の力、法爾の徳たらざるはなし。嗚呼大なる信仰の力は能く活ける理想を遂に人生の上に實現し來りて此の如く莊嚴し玉ふ。然れども信仰の極致は現在に屆るべからず、最高の理想は彼岸の樂土に在り、是即ち涅槃の靈境にして言語を以て説くべからず、想像を以て描くべからず。是れ佛陀救済の根本にして人間最終の妙果也。佛陀之が爲めに顯現し玉ひ、本願之が爲めに建立し玉へり。首を回らして人世を遡觀するに一切の群生結局相率ひて滔々として此境に流注するものならずはあらず。今や宗教界の濁れるは大に清からむが爲にあらずや。國民の大に相戰ふは世界の大平和を來さむが爲にあらずや。此境に至らむか善もなく、惡もなく、敵もなく、味方もなく、同一に念佛して四海蒼兄弟となり。恩怨一如にして平等無差別の境に達し、一切の男子は皆是父、一切の女子は皆是母、相帥ひて彼岸涅槃の大果に到着し永劫の樂果を享けざるなし。是れ彌劫の昔より盡未來際に至るまで、無量の佛陀の出現し玉ひ、十方の衆生を救済し玉へる一大理想海たらざるなし。眞個に是れ常樂寂靜の極なるもの、洵に自然法爾の最

終極致たらざるはなし。故に親鸞聖人は此境を描き盡して曰く。自然といふはもとよりしからしむるといふことばなり、彌陀佛の御ちかひのもとより行者のはからひにあらすして南無阿彌陀佛とたのませたまひてむかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんともあしからんともあはぬを自然とは申せとさしてさふらふ。ちかひのやふは無上佛にならしめんとちかひたまへるなり。無上佛とまふすはかたちもなくなりました、かたちましまさぬゆへに自然とはまふすなり。かたちましまさぬやうをしらせんとてはじめて彌陀佛とまふすとささくならひてさふらふ。彌陀佛は自然のやうをしらせんれうなりと。嗚呼彌陀佛は自然のやふをしらせむが爲に熱慮凝念五劫の思惟の苦勞あり、積功累徳兆載不可思議、永劫の修行あり。而して其間身口意の三業、一念一刹那も清淨ならざるなく、眞實ならざるなく、哀々たる慈悲凝て清淨なる樂土となり、靈徹なる智慧鍾て百福の莊嚴となる。皆是如來大悲の心血たらざるはなし。涅槃經に曰く如來は一切の爲めに常に慈父母となり玉へり、當さに知るべし。諸の衆生は皆是如來の子也。世尊大慈悲衆の爲めに苦行を修し玉ふこと、人の鬼魅に著せられて狂亂所爲多きが如しと。嗚呼哀哉、釋迦如來は慈悲の父母として、五道の獅子を導かむが爲めに、瓔珞細軟の實衣を脱して、疎弊垢膩の綴を召し、不輕大士の昔は罵詈訶の邪人をも禮して深心佛性の崇さを顯示し玉ふ。大聖文殊の誓には我を敬ふよりは打詆罵輕するものを猶先きに助けむと願ひ、龍樹菩薩の別行には態と外道の家に生れて捨惡持善の正法を興じ玉ふ。嗚呼佛海滔々として知るべからず、吾人眞に是れ渺たる蒼海の一粟のみ、凡小の小智を以て百千萬劫之を測ると雖、遂に大海の一滴にたも如かざる也。親鸞聖人警めて曰く。此道理を心得つるのちは此自然のことばつねに沙汰すべきにはあらざるなり。つねに自然を沙汰せば義なきを義とすといふことは、なほ義のあるになるべし。是は佛智不思議にてあるなりと。

和讃に曰く。聖道門の人はみな、自力の心をむねとして、他力不思議にいりぬれば、義なきを義とすと信知せり。と。我計らはざるに佛自から計はせ玉ふ。蓋し是れ先師法然上人が直接親鸞聖人に授け玉ひし所にして、深く聖人の實験を穿ちたるものなるべし。聖人北越配所五年の居諸を経て信州に涉り、常陸に移り、稻田の禪房に隱居し玉ふや。幽栖を占むと雖、道俗跡を尋ね、蓬戸を閉づと雖、貴賤衢に溢る。佛法弘通の本懷茲に成就し、衆生利益の宿念忽ちに満足せり。聖人嘆じて曰く。救世菩薩の告命を受けし古の夢既に今と符合せりと。當時六軸の聖教成り、聖人の教化一に自然法爾義なきを義とすと知るべしと云へり。聖人没後一年、惠信尼公終りに臨みて遺言して曰く。親鸞の仰も外の事は候はず、唯計はず稱名念佛するばかりに候。別に珍らしき事これあり候はば、永き御別れと存じ候、信心に變りなき人々は淨土にて蓮の對面申すべく候と。嗚呼是れ自然法爾の極致也。

### 女子教育につきて

和田 鼎

現時女子教育の氣運大に發展し來りたると共に、女學校の數著しく増加し、就て學ぶところの女子、其數都下に於けるのみにて實に萬を以て數ふるに到れり、是れ蓋し國運の進歩は教育の切要を促し、教育の進歩は、一面に於て女子教育の益々緊要なることを自覺し來りたるによるものにして、國家社會の上より見て最も慶すべき現象となさざるべからず。従て其學校の種類如きも、或は専門の學術を授けて、専ら女子智能の啓發に務め、女子の位置をして男子と並立せしめんと力むるものあり、或は特殊の技藝を教習せしめて、以て獨立自營の途を計らしめんとする特殊技藝學校あり、或は單に良妻賢母を養成するの目的を以て、女子に適切なる高等普通學を授くるものあり、細別し來れば尙其種類少からずと雖ども、其種類の大体に就て是を見れば、現時の女學校はまづ是をこの三者に區分するを得べきか如し、斯の如きは畢竟女子各人の性質、及其周圍の境遇により、自然に要求し來るところの結果にして、女子教育の發達と共に、漸次分科の必要を生じたるによるものといはざるべからず、故を以て、この三種の女學校は何れも其必要なるを見ると雖ども、若し之を國家全体の上より見て、その何れか最も急務なるやを問はば、それは第三者に屬するところのもの、即ち高等女學校程度の學校を以て最となさざるべからず、何となれば、一國に於ける男

女は自然の約束として各其分に應じ其處に順じ、適當なる配偶を爲して一家を形成するを以て最も自然に又最も幸福なりとすればなり、而してよく一家の主婦として社會に立つに足るべき智能と品性とを涵養するを目的とする機關は、即ち高等女學校程度のものなればなり、かの特殊の技藝學校の如き若くは専門の學術を授くる學校の如きは、其多數につきて見れば、一は其修得したる技藝によりて獨立して社會に立たんとするもの、一は女子もまた男子と等しく其智的能力に於て何等の遜色なしとし、よく男子と並立するに足るべき力を養成せんとするものにして、斯の如きは、共に一般の場合といはんよりは寧ろ特別の場合に應ずるの機關といはざるべからず、而して女子が特殊の技藝を修得し獨立して社會に立たんとするの傾向が、近時著しく増進したるが如きの觀あるは、其原因種々なりとすべきも、その主なる原因は、生存競争の日をふて激烈に赴くの結果、女子も又何等かの技能によりて一家の家計を助くるか、若くは婚嫁の資を得るか、若くは獨立して世に立つの覺悟なかるべからずとするによるもの、一且不幸に遭遇するの場合に於ては、亦如何ともすべからざるか如き弊あるに見て、獨立の資格を具へて以て一旦の急に當てんとするにもあるべし、此點より見ればたとひ幾分結婚の年齢を遅くせしむるも、大に改善の喜ぶべきものありといふべきも、凡此種學校の弊や往々女子をして獨身生活を取らんとするものを生ずるにあり、女子獨身生活の可否は今こゝに論するの餘地なしと雖ども、獨身女子の増加は國家社會の

全体より見て決して欣ぶべき傾向に非ず、歐米の所謂婦人問題が大に其解決に苦しみつゝあるを見は、思半はに過ぐるものあらん、たとひ今後日本の社會は男子よりはむしろ女子に適する各種事業の増加を來すべき事明かなるを以て各種技藝學校の必要は固より大なるべきも、局に是に當るものは單に女子技術者を養成するに止めずして又其弊害を除かんことに留意せざるべからず。

又女子も男子と同じく、人として之を見れば、智能の點に於て其間何等の遜色なしとし女子をして専門の學術を學ばしめ、以て從來餘りに低かりし女子の位置を高めんとするものは、理論の上より見て固より然るべきに似たりと雖ども、是又普通一般に適用すべきに非ずして寧ろ特殊の能力ある女子にのみ適用すべきものといはざるべからず、男子と雖ども専門學術を言ふに堪えざるものあると共に女子と雖どもよく之を學ぶの力あるものなしとすべからず、斯の如き女子に對して其修學を拒むべき理由一も存することなく、之が爲めに専門の學校を設くる固より必要なりといへども、斯の如きは、社會教育の進歩に伴ひ女子の素養の大に進みたる米國の如きに於て初めて可なるもの、之を吾邦の女子に適用せんは機尙早きに失するの嫌なきに非ず、たとひ然らずとも、其方針極はめて漸進的のものたらざる可からず、從來其位置の底かりし吾邦の女子に向つて、急に自由を説き獨立を敷へて極端より極端に流れしむるが如きは、寧ろ害ありて利なしといふべきのみ、彼の英國に於ける女子教育の歴史に見るも二三の女子が男子大學の卒業試問に應じて及第するに及び、初めて女

は、極めて必要にして又至難の問題なりといふべく、よく其利害の點を考察せざるべからざるものなり、凡そ何等の事物たるを問はず、一利の存するところまた一害の之に伴はざるもの少く、よく其中正を得るは極めて難事に屬す、雷其有利の方面のみを見てその害を除くに力めざるの不可なりと共に、雷其有害の點のみを見て有利の方面を滅却せんとするが如きも亦固より不當なり、斯の如きは何人も皆よく之を識るところなりと雖ども、然もこの弊に陥らざるものは甚だ鮮し、吾人は現代の女子教育に對する世人の非難に就てこの感の一層深きものあるを覺ふ、一例を擧げて之を言はば、女學生の姿勢態度の如き、人多くは優美の點を失ひて粗野に流れたりとなし、所謂女學風を以て之を嘲笑せんとす、或は街上自轉車を馳せて揚々たるより、時に或は肥馬を公園に驅りて得々たるものあるを見ては、非難の聲漸く高からんす、然れどもこは其餘りに突飛に流れたる弊害の點のみを見たるものにして、尙其半面に於て觀察するの餘地あることを忘れたるものなり、吾人は世人の非難を以て全く謂れなきものとなすに非ざるも、現時女子教育の結果として、女子の体格が著しく改善せられたるの事實あるを認めざる能はず、從來の女子がよく一里の途を歩するをも難んじ、四肢の發達甚しく不良なるに比し、現時の女子稍や其姿勢の整頓し來りたるは、何人も拒む能はざる事實なるべしと信す、雷從來の女子は優美といへる點のみに留意して、四肢の整正なる發育に注意せざりしが爲めに軟弱に失し、現時の女子は、其四肢の發育にのみ留意して、優美の點に注意せざるか爲めに粗豪に失したり

子の大學に入ること許すべしとの議論を見るに至りしも、尙女子大學尙論は國民一般の輿論なりしなり、而してこの場合に於ては特殊技藝學校に於けるよりも尙一層女子の獨身者を生ぜしむるの弊あるは歐米の例に照らして明かなる所なるを以て、其學年齡の點につきても、亦學科の編成に於ても、慎重の調査を就け、徒らに突飛なる獨身女子の増加を來さざらんことを力めざるべからず、之を要するに吾人は其性質の緩急より見るも、亦吾邦の社會組織上の諸點より觀察するも、高等女學校程度の女學校の普及を以て最も急務にして又最も緊要なりと信するものなり、かの女子の大學の如きは是が普及をまちて後、其必要に應じて起るべき性質のものならざるべからず、雷其の大學といへる美名の爲めに、急に女子の位置の高めらるるか如く思ふものあらば、洵に皮相の見といはざるべからず、種類の上より見れば大体如上三種に過ぎざるも、若し其主義方針の上より見れば大体に於て何れも皆國家的なりと雖も其中或はキリスト教主義なるあり、或は儒教主義なるあり、或は佛教主義なるあり、是等は其表面にあらはるゝ所によりて見れば著しき特色ありとすべからざるも、其根底に於ては自ら其主義を異にするもの、如し、其主義の異なるに従ひて又其方針を異にし、一長一短、一利一害、未だ俄かに一を以て他を是非すべからざるの觀あり、斯の如きは、畢竟過渡時代に於ける國民思想の不統一に基くところにして、主として新舊各種兩思想の調和を得ざるに歸因するものといはざるべからず、要するに是を過去の歴史に鑑み、是を將來の進歩に考へ、今後の女子を如何に教育すべきやの問題

とせんのみ、何れも共に其中正を失したるものにして、所謂半面の女學生風を見て、直ちに發達の運に進みつゝある女子教育其ものを否定せんとするか如きは畢竟牛角を矯めんとして牛を殺すと一般、洵に謂れなき短見といはざるべからず、こは有害の方面のみを見て有利の點を忘れたる一例なりと雖ども、若し有利の方面より見て、有害の方面を忘れたるの點に於てもまた是れと等しき欠陥の著しきものあるを忘るべからず、而して吾人は現今の女子教育の風潮の中につきて二ヶの非難あるを見る、一は即ち餘りに歐米風に流れて本邦の美風を失はんとすること、一は即ち女子の學問は其品位を高くし女子としての天職を完うするの爲めなるを忘れ、學問を以て女子獨立の爲めなりとするの風あること是なり。

一吾邦の女子教育は固より其組織を歐米に採りたるもの、就て模すべきの長所甚だ少からず、之によりて女子教育の上にも多大の進歩改良を見たりと雖ども、しかも之が爲めに動もすれば吾邦固有の美風を毀損して餘りに多く米國風に流れたるの觀あり、顧ふに米國は世界中最も女子教育の發達したるところ、女權の最も盛なる國にして從て其教育制度の如きも頗る完成の域に達せりと稱せらるゝもの、其採て以て吾に學ぶべきもの決して少からずと雖ども、然も米國はもと是れ極端なる自由主義の國にして、其社會組織より見るも個人主義旺盛なる處なるを以て、其制度の如き直ちに之を移して我に適用せんとせば、寧ろ其利を受ることなくして害を蒙むること却て大なるものあらん、一家には自ら一家の風あり、一國には自ら一國の國風あり、歴史を異にし人情慣習を異にし、社

會の組織又全く異るところの米國學風は、之を我に採用せんとするに當りては、よく其利害を打算して後其探て以て法るべきは之を採り、然らざるものは全然之を排棄せざるべからず、現今の女子教育が著しく米國風に流れたるは、嘗その長處を見るに急にして其短處を忘れたるの弊に坐するものと云ふべし、凡て國民化せられざる歐米風は害ありて益なしといふべく、國民化せられざる教育、國民化せられざるキリスト教、國民化せられざる社會主義、共に皆其可なるを見ざるなり、假りに一步を譲りて米國學風は全然之を我に移すに適當なるものとするも、單に其外面の形式的制度のみを輸入して其根本の精神を採らざれば、畢竟之れ死物のみ、又何の用をか爲さん、世の多く歐米風と稱して之を歡迎するものを見るに、多くは其外形の末に奔りて其精神を攫みたるもの極めて少きが如し、たとひ其形式と精神とを兼ねたりとするも、其素養極めて乏しき現代の日本女子に對して、既に幾多の經驗と素養とを積みたる教育を施さんとす、恰かも是れ小學の兒童に高等教育を施すと一般のみ、日本從來の女子が著しく壓迫せられて自ら自己の尊敬すべきを忘れ、甘んじて男子の足下に蹂躙せられ、獨立自治の精神を失へるを見て、女子の位置を高めんと欲し、急に獨立を教へ自由を説き、極端に之を獎勵せんと欲して、却て尊大自恣の惡風を生ずるが如きは畢竟秩序的進歩の必要を忘れて、輕々しく急進するもの、陥り易き弊にして秩序的ならざる突飛の進歩は寧ろ害多くして益なきものといはざるべからず、秩序的進歩を計るに當りては勢ひ一國の社會組織、國民經濟の程度、及び數千年の歴史に

よりに涵養せられたる一國の國風の上に顧慮して、其改むべきは大に之を改め美風として存すべきは大に之を助長し、社會組織の變遷に伴ひて之を抵觸せざるに留意し、以て教育の方針を定めざるべからず、吾人の現時の女子教育を見て最も嫌焉たるところのものは主として如上の弊害にありとす。  
 二次に世人の多く非難する所は、今の女學校に學ぶところの女子は徒らに理窟に奔りて、實際問題に當りて應用の實力なく、一朝婚嫁するも、到底一家整理の任を盡すこと能はず、其有する所の瑣々たる學識は會々以て獨り自ら高くして舅姑を苦しむるの具に過ぎずといふの點にあり、此種の非難は一新舊兩思想の衝突より起ること多く、畢竟過渡の時代に於ては免かるべからざる所にして一はまた學校の目的を誤解するに出づる所なりと雖ども、そも／＼また女學校卒業の女子が女子としての學問の目的を誤りたるにもよらずんばならず、吾人は女子教育上此種の非難につきて公平に之を觀察せざるべからざるを覺ふ。  
 由來世人は往々教育の力を過重し、只子女を學校に送らば以て其教育の能事終れりとするの風多く、家庭教育及社會教育の上に顧慮するもの少きが如し、これは全く世の父兄が教育に對する思想の幼稚なるに基くところにして、從て世の學校に對する非難、教育に對する攻撃の由て來る所なりとす、例せば學生にして何等かの不品行を爲すが如き場合に於ては、其原因が主として家庭の監督宜しきを得ざるか、若くは社會教育の不貞より來る場合多きにも關らず、直ちに其責を學校教育の不完全に歸せんとするもの多し、學校も固より其責の一

部を負ふべしとするも、其大部分はむしろ家庭若くは不良なる外圍の社會に歸せざるべからず、畢竟教育の効果は學校と家庭と社會教育の三者がよく調和し聯絡して初めて顯はれ來るべき性質のものにして若し家庭教育と社會教育とが共に不良なる限りは學校教育の欠陥は到底免かるべからざるなり。

現今の女子教育に對する非難の如きも、或は此種の誤解に基くものなきに非ざるが如し、顧るに家庭教育は男女共に其感化を受くること大なりと雖ども、殊に外に出づること少き女子に於て一層其影響の深きものあるを見る、從て家庭の良否は學校教育の効果を偉大の差異を生ぜしむべきは固より論なきところなり、現今の女學校卒業者が一家の實務に暗く、數年の日子を費やして輸ち得たるところ一も見るべきなく學校は畢竟何を教へたりやとの非難の如きも、亦餘りに學校の力を過重して家庭の教育を怠りたるによらずんばならず、世の普通女子を學校に送る者に就て見るに、少女は毎朝登校の時間に先ちて一應其容姿を整頓し朝飯を喫し、然る後下婢若くは母姉の手によりて調へられたる行厨へ稀れには自ら之を調ふるものありと持して登校し午後帰宅するやまづ其袴を脱して茶菓に一日の勞れを慰し、夜は今日の復習と明日の豫習を爲さんが爲めに机に向ふを常とす、かくの如くして家事の實際につきて練習するが如きは甚だ稀れに、かくて其衣と其食と其住と何れも皆母姉の手に委して顧みざるもの多きが如し、勢ひ斯の如くなるを以て一度嫁して人の妻となるも家事の實際に向て手を下すに由なく、人をして其何の爲めに何を學びたりしやを疑はしむるに至る、是れ畢竟少女その者の

罪にもあらず、亦學校教育の不可なる爲めにも非ずして、寧ろ家庭に於ける不用意の然らしむるところといはざるべからず、吾人がその母姉につきて何故に少女をして家事の實際に當らしめ以て之を練習せしめざるやを正すに及んで、得る處の答は等しく皆一様なり、曰く娘は朝八時より午後三時迄學校に在て、夜は自習に於て、身体と腦力とを役すること多大なるを以て、帰宅後又之れに實務を課するに忍びず、若し強て之を爲さば恐くは其健康を害せんと、母姉の情として一應理なきに非ざれども、これは學校の課程を重視したるゝ家事の練習を以て卑事と爲すの惡風によるものにして、放課後に於ける實習は却て多くの興味を感じ、身体の健康を害するが如き事なきを知らざるに由るなり、學校に於て學び得たる智識を實際に應用すべき機會は、多數の生徒を單時間に教育する學校に望むべからず、寧ろ家庭に於て多きを以て、常に其學び得たる所を實地に應用するの用意を獎勵せざるべからず現今の家庭に於て果してこの覺悟あらんか、以て女學生實務迂愚の非難を除くことを得んか、よし是を豫修せずとするも學校に於て得たる健全にして確實なる智能あらば、婚嫁後に於ける實務の如きはよく單時日にして馴るゝことを得べきなり、是によりて見れば世人が非難の箭を女學校に向てのみ放つに至るに非ざるを知るに足らん。  
 果して然らば現今の女學生に對する非難は全く家庭教育の不用意によるべしとせんか、曰く否、吾人は是を以て單に家庭の不用意のみ歸し、學校には非難すべき餘地なしとするものに非ず、現今の女學校につきて見るに固より多くの例外

ありと雖ども其教ゆるところ往々吾邦現時の状態に適切ならず、學び得る處其要を得ざるものあるか如し、女子の高等普通教育に於ては必らずしも理論の高尙なるを要せず、寧ろ實際に應用せられ得べきを要す、高尙なる理論は之を専門の機關に求むべく、決して之を普通學校の目的に混淆すべからざるなり、例せば外國語の如き男子の中學五年間に養成したる學力を以てするも、たとひ教授法の不備にもよるべしとはいへ、尙讀書力甚だ乏しくよく参考書を讀過するものなきに庶し、而して其實際の方面に於ても文法の過誤なくして單文をも草すること能はず、二三の會話にも窮すること往々なり、況んや多少是よりも程度低き高等女學校五年の過程に於て、充分なる讀書力を養はんとするが如きは殆んど不可能に近し、故に吾人は高等女學校に於ける外國語の如き其方針を實際の方法に取り、會話、書取、作文に重きを置き行ふて餘力あらは即ち讀書力の養成に力めんとす、強て讀書力と實際力とを養成せんとせば遂に其何れをも得ざるに終らんのみ、この他家事、裁縫、習字、作法等の如き女子に最も緊要なる課目の如きは尙一層その實際に應用せられ得べき方針によらざるべからず、ことに是等の課目は單に理論をして存する限りは遂に何等の用をも爲さざればなり。

良否は著しく女子に影響すべきを以て學校と家庭とは共にこの點に留意し、外圍の惡感化を受けざらしめ力めて善感化に指導せざるべからず、たとへば家庭の讀物若くは新聞の如きは力めて其撰擇に過なからんことを期せざるべからず、何事にも感じ易き少女の心は往々一新聞の記事によりてだに動され得べければなり。

目曜講話

喜 愛 心

近 角 常 觀 述

前回は親鸞聖人の平等主義といふ題で、信仰といふものは師匠も弟子も更に變る事なく、信仰を得たる後は萬人共に等しく佛陀の平等の慈悲を味はして戴くのであるといふ事を御話致しました。今日も其信仰の同であるといふ事を尙一層委しく御話致さうと思つて此題を出したのであります。偕平等と云ふに就て聖人のやり方が從來佛教の形式と非常な相違である。然し翻て其實質を見れば全く等しいのであります。私は聖人のやり方に就て豫ねて見て居たのは、親鸞聖人の形式は餘りに破格であるといふ事であつた。先づ釋尊と親鸞聖人とを比へて見ると、其形式に於て甚だしく違つて居る一軀聖人の著書を見ても、釋迦の事をいはるゝ事か妙に少ない。

勿論釋尊を信仰の對象とはせられぬ。それで若し釋尊を引き出さるゝ時は、必ず彌陀釋迦と同一に見られてある。全軀聖人が印度に出られた釋尊を重せらるゝ趣か、他の諸宗の祖師と著しく異て居る。結局形の上のみで見ると親鸞聖人の如きは、佛教としては如何はしいと思はるゝ程である。然し其意義を充分に味て見れば、親鸞聖人は實に能く佛教の精髓を發揮して更に餘蘊がない。古來佛教の形式は随分種々に別れては居るが、其間にズツと一貫して居る處のものがある。それは即ち涅槃の思想である。これは後に委しく説明するが、親鸞聖人の平等主義は此思想より出て來て居る。釋尊が其當時の社會の四種の階級を打破し、佛陀の大なる眼光より見る時は一切衆生悉く平等であるといふ事を説かれた。それが聖人になると更に一步進んで居る。聖人は自らは非僧非俗と迄稱せられた。釋尊は尙其教團に於て、或は在家出家、比丘比丘尼持と區別を立てられた處を見れば、尙幾分か區別思想か存して居たが、それが聖人になると最早僧俗の區別をも見られない。要するに形は異なる處があつても、根本の平等主義に至りては更に變る處がない。そんなら其平等主義は何處から來て居るかといふに全く實驗から來て居る。聖人の全く自己の經驗其儘が發露して教となつたのである。今暫く釋尊と比較したのは假りに私が比較したまでの事で聖人が釋尊に倣はれたのも何でもない、全く同一の味を實驗せられたのである。今日は更に進んで同一の味、同一の實驗は何んなものであるかといふ事を御話して見ようと思ふ。

本來の佛教即原始的佛教より、大乘佛教に至る迄、其窮極

の經驗、窮極の味は何であるかと云へば、等しく是 Nirvana 即涅槃である。古來涅槃なる語を滅と翻譯するが、滅といふた所で何にもないといふ事では決してない。滅とは畢竟靜寂なる境といふ事で、言ひ換ゆれば、内心の平和なる状態をいふのである。涅槃に就ての説明は古來種々あるけれども、其眞の味は全く此處であつて、是即釋尊を始め、其當時の弟子も等しく實驗せる處である。佛教も歴史的に見來る時は幾多の形式に別れては居るか、此涅槃の思想はズツと一貫して居つて、發達したる大乘佛教か此涅槃の事から眞如であるとか、或は一如であるとかと随分微細な點迄説明はしてあるが此言ふべからざる味のある内心の平和なる状態を言ひ顯はさんとしたに過ぎない。親鸞聖人が信卷に載せられたる、大願清淨の報土には、品位階次をいはず、一念須臾の頃に速に無上正眞道を超證す。といふ言葉は、我等が皆同じく淨土に至りて味ふべき同一涅槃の靈境を證する言葉である。大經には彼佛國土は清淨安穩にして微妙快樂なり、無爲泥洹之道に近かじ其諸の聲聞菩薩天人の智慧高明にして神通洞達せり、みな同じく一類にして形に異狀なし、但し餘方に因順するか故に人天の名あり、顏貌端正世に超えて稀有なり、容色微妙にして天に非ず人に非ず、皆自然虛無の身無極の體を受くるなり、と。これ亦涅槃の境の有様であるが、これは信仰の結果の平等である。若し理窟的に假定して、御經を讀むだならば假令堅に讀まうか横に讀まうか、眞の味は到底得られない、此妙味は全く實驗の結果に非んば何うしても味はれぬ。然し信仰の結果は自ら此味か味はれるのである。そこで如斯は信



仰を得たる人が最後に達するのが涅槃清淨の報土の有様であるが、其人が此世にありては如何なる状態であるかといへば、正信偈それか即今日の題に出して置いた喜愛心の心の有様である。

「喜愛心といふのは何ういふのであるかといへば、正信偈の中に、能く一念喜愛心を發せば、煩惱を斷ぜずして涅槃を得といふ言葉があるが、唯此語を讀むた丈では意味は解らぬか、若し我々が機縁深熟して豁然佛陀の靈光に接觸する時はいふべからざる喜愛心を生ずる。全轉此言葉の出處は第十八願の中から出て居るので、第十八願の至心信樂欲生の三信の中で、信樂の樂は愛樂といふ事、つまり佛を信じた味は歡喜である。親鸞聖人はまたこれを喜愛心といふ言葉で顯はされたのである。此歡喜喜愛の味は、彼の信仰の實驗を説ける觀經には、韋提希、佛の所説を聞きて、時に應じて即極樂世界の廣長の相を見、佛身及び二菩薩を見る事を得て心歡喜を生じ、未曾有なりと歎じ、廓然として大に悟り、無生忍を得。」とあり。又親鸞聖人は信卷に光明師の語を引きて、「心歡喜得忍といふは、此は阿彌陀佛國の清淨の光明忽ち眼前に現す、何を踊躍に勝へん、茲の喜に因るが故に即ち無生の忍を得る亦喜忍と名く、亦悟忍と名く、亦信忍と名く。」とある。此喜悟信の三忍は最能く信仰の經過を顯してある。喜とは即韋提希が佛の教を聞いて始めて得たる喜である。悟とは其教を聞いて己が從來久しい間の煩悶が豁然と開けた味である。信とは扱えうなつて見れば最早何うしても佛を疑ふと思ふても疑へぬ様になつた處である。此經過の状態が萬人同一だといふ事を親鸞聖人は正信偈に、能發一念喜愛心、不斷煩惱得涅槃、凡聖逆

たか、私の友人の家は一家悉く佛教の信者であるから、夫が爲めに此方は常に苦しむて居られたのである。處か昨年一人の子が生れた處が間なく死んだ爲に、漸々苦みは増して來て、それが近頃になつて殊に烈しくなつて苦みの極點に達した。處か或晩回家にあつて仕事の手傳をして居らるゝ學生と闘らず信仰の話が出て夜も非常に闘けた、其時に其學生の話に或人が一人の小供を持て居て、其母親は又非常に其小供を愛し、外へ出るにも立派な衣服を着せて連れて行く寺院へも參詣した、すれば人々が其子供の奇麗な衣服を見ては譽める、そを母親は無上の樂みとして居られた。然るに其子が四歳の時に病氣に罹つた。其時衣服や食物を與へても満足せなんだが佛前に連れて行た處が、何うした理か直ぐに満足した不思議な事であると思つて居るに、日ならずして其子が死んだが母親の悲は一方でない、遂に深き苦悶に陥られたが其子供の死が縁となつて非常な堅固な信仰を得られてからといふものは嗚呼我が可愛い子の死んだのは、全く私の爲には佛の大なる御催促であつたといふてそれより喜ばれたといふ話を聞いて、奥様は愕然として驚かれて、是非私に話を聞かしてくれよといふ事であつたから、私は直ちに參りて私の實際の經驗を話しました。それが又其人に非常の感動を與へたものと見えて全く堅固な信仰を得られました。有体に申せば話す私よりも聞かせる方の方が深く感ぜられて、夫れから段々佛の味を話しましたが、ずん／＼解かる。これ實に私が七八年前に佛を味うた味と全く同じ事である。其他過日御話をした十八歳になる盛岡の人が得られた味も、亞米利加に行かうとし

謗齊廻入、如衆水入海一味、といはれた。又信卷に彼の淨土に生ずる事を得れば、三界の繁榮畢竟してひかず、即ちこれ煩惱を斷ぜずして涅槃を得、何ぞ思議すべけんや、とある。此等の言葉に據れば、佛の救済に入る迄は萬人各別であるけれども一度信仰を得るに至りては、皆同一である。涅槃を談するは死後の事に屬すれども、信仰を得たる者は假令煩惱はあつても其内心は實に清らかなる平和なるものがある。此味が即喜愛心である。世界か佛ちや、我身か佛ちや、杯といふ様な冷かな理屈ではない。此喜愛心といふ語は、絶對信仰の同一なる事を顯はすには最適當なる語である。

此より近頃信仰を得られたる實例を御話して見ようと思ふらうすれば是迄の話が一層明になるであらう。私は從來常に往來して居る親友がある。此人は生來善人であつて、是迄苦悶したとか煩悶したとかいふ様な激烈なる信仰は頓と味れぬといつて居られた。又此人は多少社會事業に手を出して居る、其母親といふが佛教の信者である。そうして一家は實に平和であつた私も斯様な人は幸福なる人であると思つて居た。處か此間不圖とした不幸から非常な煩悶に陥られて、切角是迄やりかけた事業も全く抛棄せんと迄せられたが、其時嘗て私が話をした阿闍世王の事實を思ひ出されて、嗚呼是迄は何ともなしに聞て居たが、我ころは實に其阿闍世であるといふ非常な罪惡觀に陥られた。然し不幸の事實は全く間違であつて其後此人は堅固なる安心を得られました。夫れから又つい近頃の事であるが、其友人の奥様が非常なる苦悶に陥られた。此方は嘗て西洋人から基督教を聞かれて大分其方に傾て居られ

て出掛けられた婦人が、太平洋の船中で得られた味も、總て皆同じ事である。茲に同一の味といふのが即喜愛心である。私此時殊に感じたのは己に一年前に御子が死なれた時に嗚呼此一家は之か縁となつて信仰に入らるゝに違ひないと深く思ふて居たるか今日事實となつて顯はれた事である。實に我子の死んだのは私の養生法がわるかつた爲に死んだのではないかと思ふと全く私が殺したのも同じ事ぢや、といふ迄深く感ぜられた其方がよく／＼聞いて見れば死せる我子は、我が善知識であつたと感ぜられて始めて他年の苦みが一時に霧れて、喜ばれた其時私は實に奇異の思がした、信仰の話は兎角肝心の時になると更りて要領を得ぬ様であるが實に此通りである。

思ふに世界は人の信仰に入るべき事實に満ちて居る。人々互に多少の經過に相違する處があつても、皆悉く或は山を登り谷を越へ幾多の辛酸を嘗めて遂に同一の廣大なる平原に出づるのである。私は多くの人が信仰を得られた實驗を聞く度に深く感ずる事である。御互に長く交さ合て居る朋友でも何時でも必ず信仰の話が出ることも限らぬ。それが突然話が出て然も如斯立派な信仰を得らるゝといふのは如何にも不思議である。

前申した實例で今ひとつ明に感ずる様になつたのは、基督教と佛教との信仰上に於ける區別である。基督教では人は何處迄も正義でなければならぬといふ、成程其訓練する處は佛教と能く似て居る様であるが、全體基督教は常に高尚なる理想を持って、居て何でもそれに達しようとする故に、日夜苦みがあつて心に平和がない様である。私の今話した方が他年苦ん

て居られたのは全く此點である。其方が佛教の信仰に入ら  
 てから、非常な安心を得られたのは何うかといふと、一念喜  
 愛の心を起されたからである。私の友人も信仰に入らるゝ前  
 迄は其人のやつて居る社會事業とても、社會の人の爲にせぬ  
 ばならぬ、我は人の爲にするのである、といふ念か去らなかつ  
 た。處か信仰を得た後は全く一變した。或人の言に據れば、我  
 前には我半生の歴史は穢れて居るか、後半生には何うしても  
 之を償はねばならぬと思つてやつて居たか一方ならず苦しか  
 つた。然るに今日は幸に佛陀の救済に預る事を得て、佛陀の大  
 なる慈悲は、已に我か半生の穢を拭ふて下さつた。然して今  
 後半生に於ける社會事業は、悉く我此偉大なる佛恩に謝せん  
 か爲にするのであると知りて内心實にいふへからざる歡喜の  
 思に満たさるゝといはれた。トルストイの説杯も但に理想と  
 して見るのは善いか、實行はとも出来ぬ。いは、親鸞聖人  
 の如きは彼のトルストイの理想とする處を佛の理想とせられ  
 た。トルストイの信仰は餘程佛教に似て居るが、それでも  
 明了なる相違か認めらるゝ。佛教ていふ佛陀の慈悲とは、人  
 の罪惡を許すとか許さぬとかといふのではない、唯罪惡には  
 更に氣をかくるなといふのである。和讃には本願圓頓一乘は  
 逆惡攝すと信知して、煩惱菩提體無二と、速に疾く悟らしむ。  
 とあるが、これ又正信偈の、能發一念喜愛心、不斷煩惱得涅槃、  
 といふのと同じ意味である。

前より述へし如く此涅槃の思想は、全佛教を一貫して居る。  
 此思想は即いふへからざる味のある喜愛心より生するのであ  
 つて、佛教の佛教たる處は茲にある。そこで佛教各宗共釋尊を

同一鹹味

苦悶救済の實驗と

余が信仰の告白

敬愛する三好先生足下

時下晩秋初冬の候、四山の木葉既に凋落して滿目の風光轉  
 た落莫たり、大光照護の下先生の御健勝を慶賀し、併せて平  
 素の疎遠を奉深謝候。

想ひ起す三十四年の初秋、吾れ五城の學窓に入り候てより  
 親しく先生の温容に接し、その高教を仰ぐを得たる何の幸か  
 又これに過ぎんや、爾來三年先生毎に寛宏の襟度、熱實の信  
 念を以て啓導し、薰陶し給ふこと終始一の如かりき、その間  
 先生に負ふ所の如何に大なるかは、恩義に感ずる遲鈍の性と  
 雖も余の肺肝に徹して忘るゝ能はざる所に御座候。

吾れ一度思ひを人生問題に向け候てより、人生の歸趣と生  
 存の意義とに想到し、先哲の事蹟を尋ね、古賢の言行に鑑み  
 儒教に求め、佛教に搜りて、馳げにも光明を認むるを得候ひ  
 し後は、醉生夢死の如何に陋劣なるかを思ひて社會紛々の狀  
 態に満足するを得ず、超世の彼岸を憧憬し、絶對の靈境を理  
 想して日夜これが實現の道につとめ候、然れども非才魯鈍の

奉ずるが、親鸞聖人は特別に尊奉せられない様である。御存じ  
 の通り眞宗の寺院には釋迦の像の安置してある處はない。然  
 し此處が味うべき點であらうと思ふ。和讃に、釋迦如來かく  
 れまし／＼て、二千餘年になり玉ふ、正像の二時は終りにき、  
 如來の遺弟悲泣せよ。末法五濁の有情の、行證かなわぬ時な  
 れば、釋迦の遺法悉く、龍宮に入り玉ひにき。正像末の三時に  
 は、彌陀の本願廣まれり、像季末法の此世には、諸善龍宮に  
 入り玉ふ。と釋尊として教は中々行へぬが彌陀と一致したる  
 釋尊として其涅槃の味を知るべきである。

要するに、親鸞聖人は佛教の極點たる涅槃の味を、喜愛心  
 を以て心の平和なる、麗はしき歡喜の有様であると説かれ  
 たのである。古歌に、うれしさを昔は袖につゝみけり、こよ  
 ひはみにもあまりぬるかな。といふのがあるが、實に能此味  
 を顯はした歌である。我等が味ふべき涅槃の味は此より外に  
 はない。親鸞聖人は信卷に涅槃經の阿闍世王の事業を引いて  
 ある。此御經には五味の譬へが出てあつて、此涅槃經といふ  
 のは五味の中で最も勝れたる醍醐の味で、此醍醐の味が即涅  
 槃の味である而して親鸞聖人は直ちに之を本願醍醐の妙薬と  
 稱せられてある此本願醍醐の妙薬たる涅槃の味を、即喜愛心  
 によりて顯はされたのである。又其喜愛心は信仰の實驗より  
 來るものであつて、親鸞聖人は表て立つて釋尊を奉しては居  
 られないけれども、聖人か信仰の實驗は自ら能く釋尊の精髓  
 を發揮し得られたのである。此精髓を言ひ顯はされたのか喜  
 愛心であります。

資、志急にして行これと伴はず、理想は現實と背戻して所思  
 の万一をすら盡すを得ず、濁浪の穢弄益々甚しきを加ふるに  
 つけては、自己が信念の基礎を疑ひ、百謀百敗して精神に安  
 住の地盤なく、意氣沮喪し、志望弛退するに及び、翻て過去  
 の經歷を閲するに過失と悔恨の跡のみ多く、大天大地五尺の  
 小軀を安んずる所を得ずして失望落胆の深淵に墜落し、自棄  
 放任の果ては空しく理想を放擲して、一身を墮落の犠牲に供  
 せむかと思ひ詰めたりし一刹那、難有や大靈の救護し給  
 ふ所、光明赫灼として闇黒の胸底を照らし、廣大の慈悲を感  
 得して半死の心氣再活し、苦惱忽ち滅し、恐怖忽ち去り、身  
 は依然として汚濁の人世にありと雖も、心は超然として絶對  
 の靈境に遊び、罪惡の深重なるに苦みし煩惱兒が一朝にして  
 佛陀最愛の寵兒と變じて、日夜に感謝と希望の生活を送る吾  
 が昨今の境遇、思へば夢の如く現の如く、自らも不思議と云  
 ふの外御座無く候。あゝ如來救済の靈光顯然として旭日のそ  
 れよりも明らかなるに非ずや、そを知らずして徒らに個性の  
 發展を求め、有限不完の小智に信賴して無限絶對の靈境を測  
 定し、自ら吾が身を救はむとして奮勵し、努力し、而してこ  
 れが到達の道に苦しみたる吾が半生の歴史は、例へば彼の地  
 に立ちて自らを天に揚げんと悶ゆる痴兒の技を演ずるに等し  
 かりしか、今や漸く自力作善の寸功なく、爲めに悔恨苦惱の  
 依て來る所以を自覺し、如來救世の船願に乗じて吾が流浪辛  
 酸の跡を想へば、轉た感慨禁する能はざるもの有之候。

敬愛する三好先生足下 吾れは今佛徳の廣大なるを讚嘆  
 するに望みて、勇氣滿身に溢るゝを覺ゆるものに御座候、始

め吾れ人生の海に船出してより、怒濤狂瀾に揉まれ、苦むこと多年、九死のまきは幸に絶對如來の救済にあづかり、不退の信念を獲得するに至れる今日の状態を陳述するに望み、前きに悉く過去失敗の経歴を懺悔し、後に慈光を感得するに至れる顛末を披瀝致度御座候、先生願はくは余か今語り出てむ穢れの跡、暫し忍んで聴かせ給へかし。

吾が心の漸く人生てふものを思慮するに至りしは、盛岡中學に於ける四年の暮なりと覺ゆ、友の導きにて當時青年啓導の熱心家、佐藤大醫師が脩證義の講席に列したるが縁となりたるに御座候、爾來懺悔滅罪、即身是佛、生死即涅槃、煩惱即菩提、等の問題は余の好奇心を挑發し、全く趣味の念に驅られて佛教の所説を探り、其の意義の深遠幽玄なるを喜び候、余は未だ人生の實際問題に密着して佛教を翫味消化することを知らず、嘗に一種の哲學として攷究するを愛し、有縁の佛書を繙くをば此の上もなき娯樂と致候、然れども人生の歸趣と意義とに對する余の解釋は、此の間に於て漸く曙光を放ちたるもの、如く、又余が從來維持し來りし人生觀なるものも、此の時に於てその基礎を建設したるかと思は候。從て理想てふもの漸く念頭に兆したるにつけて、切にこれが到達の道を講じ、或は戒律を設け、或は勤行を勵み、清淨潔白の生活を憧憬して、社會混濁の風潮に近くを厭ふの心、漸く強さを加へ來り候、自ら皎潔を信ずる深き見地よりして、驕て吾が學友の云爲行動を見るに、何ぞ其の思想の淺薄なる、何ぞ其の所爲の兒戯に類する、友は友を求むるに急なるに、吾れは友を求めむとも願はずして、やがては彼等と歸するを

と吾れとは、一毫の加ふべきもの無くまた減すべきもの無きに非ずや、等しくこれ佛作佛業なり、吾等は現在に満足し、將來に希望し、修養奮勵日々新たに、以て向上の道を辿り、究極の彼岸に達すべし、こゝに安住あり、こゝに生命あり、とこれ余が固持し來りし從來の信念に御座候。然れども人生好事少なく魔多し、順境稀にして逆境常なり、愚鈍の資、徒らに崇高の觀念を懷いて力行これと伴はず怨恨、憤懣、猜疑、排陥の劣情依然として胸に充ち、光明の彼岸遠くして現在の苦惱を除くに足らず、力めてこれが抑壓を試みれば却て強度の反抗あるを如何せむ、理想現實絶へ間なく争闘を生じて衷心更に安穩の餘地無く、友にをむき人に背きて自らを救ふ能はず、苦痛感亂淺ましと悶ゆるのみに御座候、淺ましとは覺えつゝも、自らの主義に安ずる外に他に救済の道あるべきを信ずるに至らずして、猶力の足らざるに依るべきを思ひなしては、切にこれが策勵力行に憧がれ候ひき、自らを救ふは自らなりてふ思想は余を斯くてに欺きしよ、日を送り月を経ると雖も涅槃の境涯千萬里の外に遠く、煩惱は巍然としてその鋒鋒を收めざるを如何にすべき、されど主義の實行上、失敗の中にも又時には一二の成功ありし、此の時ばかり流石愉快を感じ候得共、一難排し去れば百難忽ち襲來して、微弱の一身、その負擔の重きに過ぐるに逡巡すること屢々なりしに拘らず、汝は當來の佛陀ならずやとの喚聲に勵まされ、餘喘を保ちて關濁の潮流に逆行し來りたる次第に御座候。斯くまで力弱き吾れ乍ら、内に虚偽の心をいたきて外に賢善精進の相を現じ、自ら人格の博大を標榜し輕侮の眼を以て衆人を瞰下いた

屑とせざるに至り候、諺に所謂人生文字を知るは苦惱の始めか、あながちに謂はれ無きことにもあらぬべく候、自ら清淨を理想するにつけ、自己がなしたる些細の過失も、さきに較ぶれば強度の苦痛を以て反射し來るやう相成候、『佛性を具する吾れなれど過去劫來の煩惱の、明鏡を曇らすの致す所なれば、やがて脩養積善の後は心の欲する所に從て炬を超へざるの妙境に達し得べし』と信じて、不完全なる吾が心を慰藉するをば常と致候。絶對佛陀の靈境を渴仰する吾が心の止め難く、考察漸く主觀に入りて佛陀の教訓を信奉し、理想を人生の實際問題に實現したき希望勃々として起るにつれ、道友と互に信念を語り、修養を勵むを喜び、熱烈度を逸して遂には學課を忽諸に附せることも候ひき、中學最後の一年は斯くて寺院生活の中に暮れ候。

次て吾れは仙臺の學窓に學ぶ身と成り、求道の友の集ひなる道交會の自治寮に入りしは三十四年十月六日の夜にて御座候、當時余は臙乍ら人生觀の成立し居たるを信じ候、而してろは爾來余の言行を支配せる主なる力なりしを思ふものに御座候、大聖釋尊のたまはく、『吾れは是れ已成の佛、汝等は是れ當成の佛なり』と、此の一言は吾が思想の根底に浸染して光明希望を與へ、修養の基礎全くこゝに成立するにいたり候、吾れ思ひらく、『今の吾れは、よし不完全のものなりとも、やがては佛陀の境涯に到るべし、然れども想へ、現在に於ける吾が云爲行動は、現在に於ける最高絶對のものに非ずや、大臣政柄を執て國家を治む、吾等ペンをとつて校庭に學ぶと何等の徑庭かある、等しくこれ絶對最高の境、現在に於ける彼れ

し候、虚偽は虚偽を被ひて徒に聖賢の態度をとる、心中の苦痛言語の盡くす所に非ず候、煩惱の深重なる、自己進善の光明を否定し、外に容れて内に排し、自ら欺き自ら悶へたりし心中の陋態、申すも耻かしき程に御座候、而して己れを責むる甚だ寛、人に求むる甚だ急、人の吾が意の如くならざるに怒り、人の過あるを咎め、他に背きて而して自ら改むるをとめず、理想何處にありや、主義如何にありや、而して尙理想を掲げ主義を叫ぶ何等の狂態ぞ、淺ましとも淺まし。事志と違ふ斯の如しと雖も吾れは未だ理想を放棄するに忍びざりき、自ら悶へ乍らも此の主義を眞乎の生命なりと信じたるが故に候、たゞ己れが不完全の致す所と思へるのみにて、未だ己れが罪惡深重、煩惱具足の凡夫たるを自覺するに至らず候。

敬愛する三好先生足下 吾れは今佛天照護の下、何事も包み覆はんとは願ひ候はじ、陋劣の心情悉く打ち明けて懺悔仕るべく候、願はくは暫し忍んで聴かせ給へ、余は斯く理想と現實との争闘の間に曖昧なる生活を送り候、然れども偽善の罪、佛陀の責罰至れるものか、余が標榜せる皎潔の理想に對して自ら拭ふべからざる汚點を刻み、苦悶悔恨の極は余が人生觀の見る／＼瓦解するに至りし失策をこそ生じたるなれ、吾が疎かなる心より友の人格を侮蔑し、爲めに非常なる苦痛を與へたることこれに候、そは何事なりしか、友は何人なりしか憚り多ければそを語らんをば許させ給へ、法律道德の如何は更に問ふの要なし、然れども信仰あるものゝ態度としては斷じて許す可きことに候はず、過失々策素よりその數擧ぐるに堪へず候へども、此度余にありては最も重大のものにて候

いさ、人を責むるにのみ急なりし余も、此度は自己良心の呵責の聲の中に高くして、悔恨の念勃然として起り、懺悔の心油然として止む可くも非ず候、あゝ余は余が潔白の人性を傷けたるものなり、清浄の理想を汚がしたるものなり、過失の自覺につれ苦惱は苦惱を増し來り、はては恐怖、戰慄を生ずるに至り候、然れども友は賢なる人なりし、余の過を怒らず、余の愚を責めず、平然余との交はりを捨てんとも思はざりき、余は益々その人格の皎潔に耻ぢ地にも入りたき心地致候、想ひ見る吾れも人格を標榜し、求道の態度をとる一人に非ざるか、余はあからさまに其の過てるを詫びて友の寛恕を乞はざる可らず、然らずば余の人格と信念とは全く滅了し去るの悲運に至る可く、又何の面目ありてか再び友と提携するを得べきぞ、余は斯く決心したり、剛愎不遜嘗て人に首を屈せざりし吾れ、實に千萬無量の苦痛を忍んで悔恨の情を悉く友の前に告白いたし候、千鈞の重きを以て壓迫せられたる余が當時の胸中は、光明なく、暖氣なく、寂寥蕭條、寒風雪を囓んで廣野を拂ふの思ひ、苦痛言語に絶し候、かくて余は一時胸中の汚穢悉く洗ひ盡くされたる如く頗る慰安を覺え候、吾が友は飽まで廣量の人なりき、始めより余が謝罪を聞くを豫想せざりしもの、如く、依々として寛恕し、頗る親愛の情を以て余を迎へ呉れ候、吾れは此に全く懺悔を捧げ終はりたり、吾が心汚れあらざるべきか、吾が心平かなるべきか、然れども余は既に理想を毀損したるものなりとの悔恨苦痛の情、懺々として去らざるを如何にせむ、あゝ吾れ過てり、吾れは拭ふ可らざる過失をなし果てぬ、此の恨何を以て慰するを得べ

きぞ、懺悔は滅罪を意味せずや、昨の吾れは今の吾れに非るべきに、斯く觀じて慰籍を求むれども深く腦裡に刻まれたるこの恨、朝な夕なに浮び出て、は、平靜の胸底ために惑亂し、思想滅裂して悶々の情拂ひがたきに至り候、回顧すれば過去の經歷、悉く失敗と悔恨の跡のみ鮮かなり、吾れいつの日か菩提を成就し得るものぞ、思ひ亂る、吾が最後の望は、吾が後半の生涯を莊嚴して過去の罪惡を拭はざる可らずとの一點に歸し候、斯く觀念して余は再び滿身の勇氣を奮つてこれが實現力行を勵み候、道交會三年最後一年に於ける吾が經歷は苦惱滅了の努力と、積極的奮勵との間に夢と過ぎ去りて、青葉山の綠色濃く、廣瀬川邊に杜鵑啼く頃、余は五城の學窓を辭するに望みても未だ自らを苦惱の中より救ふに至らず、空しく悶々の情を懷いて更に東都の迷兒と相成りしは、今年の九月十日、同時に余は求道學舎に一員と相成り候。

余は引續いて自力修善の道を迎えり、されど深く記憶に染める心中の苦惱は、執念くも余に伴うて又學舎の中に余を苦しむること、相成候、次に爾來余の企てたりし贖罪の積極主義の經過は、依然舊態を改めずして現實と衝突し、理想の彼岸遠くして煩惱の跋扈何ぞそれ猛烈なる、余はあまりの苦痛に堪えて、或は吾が心の散亂に走せて安定の地位に止まらざるの致す所なるべきかと思惟し、禪定を修して明鏡止水の境に達せば、恐らくは此の悶々を治するを得べしとし、とある禪庵に參じて坐禪の道に就かんとせしも、其の授けられたる公案を専心に工夫せんには、余が現在の胸中に對してあまりに關問題の如く覺ゆるを如何にせむ、現に余の望む所のものは

唯慰安のパンのみ、その製法を講ずるの閑日月を忍び能はざる吾れは、遂に端座工夫の勇氣をすら失ふに至りたる次第に御座候、かく禪門の公案に飽かず覺ゆるも、先入主となれる吾が他力嫌厭の心は、別に救済の道を聞かんとせめて、たゞ年來讀みたる聖賢諸佛の教諭を記憶の中より呼び醒し、更につとめて余の理想する満足主義を内心に鼓吹致候へども以て苦惱の狂瀾を沈むるに至らず、遂には此の過去罪惡の苦痛と、前途所志の齟齬とより來る悶々の潮流は、余を驅りて驚くべき精神的自棄墮落の境に誘ひ、一直線に本能主義の渦中に投ずるに至り候、希望の靈光日々に薄らぎ行く吾れは、苦惱の反動として物質的慾求の満足を得、以て一代の意氣を銷せむとの希望を生じ來り、靈的生活の失敗に對する必然の結果として、浮世の榮華豪華の俄かに望ましく、醉生夢死と過ぐる人の却て幸福なるを思ふに至り候、事實此にいたりては聖賢の書を繙くことの懶く、友と道を談ずるをすら喜ばずなりて、今は戀愛文學、浮薄の稗史却て會心の友と成り來れる、自らも怪しき程淺ましう候、嘗ては腐敗墮落てふ文字すら見聞するを嫌惡したる吾れ、如何なれば昨日今日聖賢偉人の言行を喜ばざるに至れるぞ、かくて余が悶々の半生を慰籍すべき唯一の望は、本能主義の遂行と一變し去りたる、今にして思へば實に悚然たらざるを得ず候、日記を繙いて當時の思想を回顧するに、ろの不健全なる心的状態を窺ふに遺憾なく、念のため此に二三を抄記いたし候。

一 煎の食、一瓢の飲、陋巷にありてその樂みを改めざる顔面を賢なりとし、隆なりとしたる吾れ、過てり彼れは生存競争の失敗者に非ずや、あゝ金殿玉樓榮華の夢を食はるの快に及ばざる遺し。

道念の下衣食ありと信し人にも説きたりし吾れ、過てり、衣食足りて後禮節を知るに非ずや、自ら衣食を給する能はずして、徒らに大道を暇々何ぞぞ恐なる、吾等は余力を擧げて物質的慾望を満足するにつとめずや、慈濟救世の聲、財產平分の叫、何ぞぞ恐るるや、そは皆弱者の聲、敗者の叫に非ずして何ぞ、吾等は弱者たり、敗者たるを耻づ、須らく競争場裡の勝者たるを期せざる可らず。

名譽功業は浮雲の如しと云ふは老弱者流の嘆語のみ、眞に青年の活氣を沮喪せしむる毒言なりと謂ふべし、名譽功業なくば人生何の希望ある、努力畢竟何するものぞ、假令浮雲の如くとも、吾等の意氣以て銷するに足るに非ずや。

これ余が本能的思潮の一端を表はすに過ぎず候へども、當時余は實にしかく思惟し、眞面目に人生の榮華を謳歌致し候殊に彼のルイ十四世の宮廷生活の豪華盡くるなきを讀むに及びて、快哉を絶叫したる次第に御座候、余はかく現世的榮達を生命とし、社會人衆と驅逐して半生を送らむことを思惟し、始めて東都の學窓にヘンをとりたるときは、獨り榮華の絶頂を夢想し物々たる野心に驅られて意氣天を衝くの有様にて御座候、同時に余は聖賢に對する渴仰の念日々薄らぎ、同人に對する友愛の情漸く冷え行くを覺え、遂には人を惡み、友を怨み、はては親戚を疑ふの傾向をすら生じて、孤影蕭條、大天大地一人の友なき状態に陥り、憤懣、猜忌の念迸發して胸中寂寥、原野の頽石を撰ぶところなきに至り候、然れども苦惱の痕は依然として去らず、如何なれば余がなしたる過失の跡余を苦しむること斯の如き、今放逸の態度をとれる吾れなるに、道義的觀念の反射何を強大なる、思は思と混亂し、はては座に堪へて市街雜關の間、郊外山川の邊、思を晴らし氣を散じて暫しの慰籍を求め候。

近角先生は苦悶者救済の門戸を開き給ふに非ずや、而かも

先生を通じて慈光を感得したる者多しと云ふに非ずや、然れども頑強に先入主となれる吾が他力嫌悪の心は、同屋の下にあり乍ら未だ先生に道を尋ね、救を聞かむとも思はざりき、現に今夏大澤温泉に於ける講話會にて、先生が歎異抄を講じ給へる席に列したるに拘らず、余は之を聞かむとも願はてたゞ空しく過ごしたる程に候、當時余は念頭苦悶を感ずる甚しかりしも、先生が説き給ふ所の苦悶罪惡等の語をば蛇蝎の如く嫌ひて、たゞ自らは座禪靜慮によりて放心を收し、いつかは苦痛を脱し得べしと信じたる次第に候、因縁の到らざるところ如何とも致し難く、今にして想へば淺ましき沙汰の限りに御座候。

余は斯くて一の安心なく思ひ亂るゝこといつに變らず、或る夜のことなりき、余は親しき道の友と手をとりにて不忍池畔を散歩いたし候、天地寂寥、星斗燦然、電燈の光上野の森に閃めきて、行人影漸く稀れに、唯友と吾れと歩める如くに覺え候、余は最も適切なる説明を得べく豫想して、徐ろに問題を提供し罪惡救濟の道を尋ね候、同じ道程を辿れる自力修養の吾が友は、余の所謂現在満足を以て安住の地盤たるべきを答へ候、吾が心頗る飽かず覺え候、友は斯くして安心し、吾れは斯くして煩悶す、余が自信力の足らざるにも依るべきか、再び思ひに惑はされて吾れは又現在安住の主義を鼓吹致し候、その夜の日記今緋けば轉た感慨の種に御座候。

吾れ大道の存する所に安んじて將來に向ふべく疑惑と悔恨とを懐かざるべし、過ちを過去の力及ばざりしききに起れるもの、過てを自覚しての後には又その過ちを繰返しつゝあるの身にはあらじ、一瞬毎に生滅するは人世の態なれば、過ちの身は昨日既に滅して今日は又新しき望いだへて生れたるなり、安ん

は幾度か義務的に講話の席に臨みたりけむ、されど心を空しうして聽けることは更に無くて、かたくななる自己の見解より批判を加へたるを以て其の精神を得るに難かりしは當然の事に御座候、一旦自力の無力なるを思惟するに至れる吾れは此の日始めて虚心に聴講し、聖人人格の博大崇高實に窺ふべからざるに驚嘆し、その信念の金剛不壞なるに感激し、如來救濟のたゞ事ならざるを思ひて、爾後は只管聖教に慈光を味はむものと覺悟致したる次第に御座候、フト思ひつきたるは近角先生の著「信仰の餘瀝」に御座候、此の書を讀むる人の中には因縁をここに開發して信仰の門に入れるもの多しと云ふに非ずや、嘗ては何等の感興もなく讀過したる書なれども、又或は慈光を認むることもやあらむと思ひて再びこれを精讀したるは、實に十一月一日に御座候、讀みもて行くに「信界に於ける監獄」に至れば、言々剗功、句々痛快巧みに余が現今の心的状態に的中し、肺肝ために貫かるゝ如くに覺えて此に始めて自力救濟の寸功なきを根底より自覺し、絶對他力の一門に歸するに至り候、この書は眞に余が年來の疑惑を一朝にして解決したるもの、爾來は「余か絶對他力の信仰を得るに至れる因縁開發の書」と命名つかまつり候、吾れにとりてあまりに懐かしき一章なればこゝにその要旨を摘載致度御座候。

(前書)吾人の心が吾人の慈心の爲めに繫縛せられて居ると覺りてみれば、是非とも吾人は此繫縛を解脱せねばならぬ、そこで吾人の心中で善き心と惡しき心と戦争が起る、そして其戦争の結果は如何であるか、吾人は内心の經驗に訴へて考へてみるに何時も惡しき心が勝鬪を擧げて居る、凱歌を謡て居る、然らば如何にして此勢力ある惡しき心を退治すべきか、私の考にて唯平抱強く善心を發達せしめて其力を以て惡しき心起る度毎に、用捨なく其首を顧るより外に

するを得べきはたゞこれのみ、(十月三日、日記の一節)。  
然れども吾が心寸毫の清きを覺えず、苦惱は依然として苦惱なるを如何にせむ、

此の日陰雨しきくとして気分惡しきこと謂はん方なし、近角先生仙臺に赴かれて在まし給はず、夜に入りて胸中の悶々更に甚だし、ひそかに佛間に入り佛を念うて自ら思ふ、あゝ吾れは迷に墮つもの、理想再び破れて又もや開路に入るなり、努めて光明に近かすは吾れは永久に墮落しつらむ、怖るべし、反省するに汚濁濁々、汚れのあまのみ多きぞ悲しけれ、自らを忠實に導くは自らの努めならずや、あゝ人生險り多くて光につきがたし、あゝ(十月十七日、日記の一節)

然れども苦痛の襲來と理想の背反とに意氣挫けて自力作善の自らを救ふ能はざるを馳ろげに感ずるに至りしは漸く此の時よりと覺え候。その後ある夜、余は又友と手をとりにて散策に出で候、現在安住! 余は幾度かしかく觀じ、しかく努めぬ、而して安住を得ざるを如何にせむ、あゝ余は遂に自らを救ふに至らずして終はるべき乎、離れて見るに法然親鸞は云はずもがな、現に余が知れる道友幾多、絶對他力の信を得て歡喜安住するに非ずや、余は遂に自らを救ふ能はざるに、例令今如來の救濟は余の未だ解する能はざる所なるも、現にそが事實を見るに於ては、いつかは余も救濟に與かり得べきを信ず、とこれはこれその折友に對して余の述べたる所に御座候。

敬愛する三好先生足下 今にして思へば如來救濟の曙光余が胸を照らし始めて自力作善の心を離へし絶對他力の一途に歸するの端緒は、既に此の時に於て開かれたるものゝ如くに御座候、十月三十日は求道學舎に於ける日曜講話會なり、近角先生は「親鸞聖人の人生觀」を題目にて講話せられ候、余

策はない、かくする中に修養の結果として如何にも善き心になつた氣持になる、かく善き心が發達してみれば、氣持がよい、愉快である、随分骨は折れるも、骨折れた丈の快感がある、勿論人は氣儘放逸に暮すも一種の下等なる快感があるが、之に打勝つて自ら清淨にすれば又一層高尚なる快感がある、最も我は善か爲せりと云ふ感覺には特別の味がある、寧ろ善自身を樂むと云ふよりも善を爲したりと云ふ點が樂しい、隨て世間を見れば随分淺ましい喜しをして居ることがよく分てくる、他人の欠點は随々として目に映る、世譽て皆濁れり、我獨り清めりと云ふ感を生ずる、他人は随分我に對しても不人情である、されど我は強めて厚意を以て之を酬ふこととする、勿論心中は頗る苦しけれど、我は怨に報ゆるに徳を以てせり云ふ考で満身の勇氣を以て之を忍んでゆく、ところが人間は随分薄弱なものである、一度や二度は忍ぶことが出来るが、度重なれば忍べば忍ぶ程如何にも他人の不人情が腹立たしくなる、是程までに厚意を盡すに如何にも他人が不感謝であると思へば單に自惚心に止らずして遂には心中に頗る不平鬱勃として起ても堪へられぬ様になり、結局善を爲さぬときよりも、却て心が不安になる、今迄惡しき心の繫縛を、善き心で断ち切つたと思ふたのは大なる誤にして居つた橋樑の世界に墮落して居つた、惡しき心の鎖の鎖を脱したばよけれども又善き心の金の鎖で繋かれた、してみれば、惡しき心のみが監獄ではない、善き心でも力味心のある間は、如何にするも監獄を脱すること出来ぬ。

此に至りて我は失望千尋の淵に沈んだ、落膽萬尺の谷に陥つた、初めて人間の價值は此位の物なりと分つた、噫、吾々の身も心も監獄である、今はだゞ惡しきも善きも、決して我自ら手を下すことが出来ぬ、浮ぶも沈むも我力にては逆も及ぶべからず、たゞ善き人の指圖に任せ奉るより外はない、惡しき所に往かむとするも我計ひにては叶はぬ、我は毫も自由なき身であるが幸に攝取の手に觸れ奉りてより廣大なる心光中に徜徉して見れば、他人を左程不足とも思はぬ我々全體空虛なるゆゑに、又少々親切をなしたりしてあまり立派なことななしたりとも思はぬ佛の親切に較べなば無きも同様である故に此に初めて心廣々として自由の天地に出して貰つた、噫、離れてみれば「力味心」が信界の監獄であつた、我經驗によりて覺悟界が分つた、所謂七寶牢獄の恐るべきを悟つ

た。(下略)

吾れ此の章を讀み終はりて愕然として自己が抱ける思想の誤謬なるを悔悟し、年來の疑問此に氷解して絶對如來の救濟を乞ふの念勃然として生じ來り候、感ずるがまゝにしるせる日記をかきてその日の感慨を述ぶるに更へ候。

あゝ吾れ誤れり、吾が過去の歴史は皆自分でカテゴリーを立て、來たのである、されどこはあまりに力無きものであつた、かくても尙自分が佛に成れるの考が離れぬので、自分が自分で當來の佛陀を以て任せて居つた、うゝて今までは制限がある、極度がある、理想を現實にすることなどは到底出來る筈のものではない、自分が過去の罪惡苦痛も皆この矛盾衝突から來たのである、人間の生命には限りがある、しかも煩惱が無盡であるのになんとして自分の小さな力で拂ひ盡くすことが出來やうぞ、自分の修養で涅槃の靈境に達することが出來るなどは思ひもよらぬことである、今までの自分の考は皆妄想であつた、自分でどうすることも出來ない自分はたゞ如來攝取の御手にすがつて苦しみの中から救ふて頂く外に致し方ない、(十一月一日、日記の一節)

此夜決然近角先生に胸底の全般を披瀝し、慈光瞻仰の狀を告白致し候、時しも余にとりて最も幸なりしは余が道兄高橋勘太郎氏の出京致したることに御座候、氏は陸奥淨法寺村の商人、熱烈なる絶對他方の信念を有する人に御座候、余は求道のため一週の間全く課業を放擲し、氏を招じて日夜共に聖教を窺ひ、信仰を談じ、救濟の實驗益々深きを加へて此に全く安心決定するを得るに至り、歡喜の情むらゝとして起り、思はず唱名念佛に耽り候。

余の最も適切に慈光を感得したる有縁の個所は、大經の第十八願と觀經の下品下生の救濟、歎異抄と淨土和讃、教行信證に於ける二河白道の喩と王舍城中の悲劇とに御座候、殊に

を救はむと擬せり、例へば木を縁りて魚を求むるの類か、思へば實に淺間しき限りに御座候、吾が身は本來罪惡の塊、煩惱の体なるに非ずや、あゝ此罪惡を以て罪惡を拭ひ、煩惱を以て煩惱を滅さんと努む、安んずる能はざる蓋し理の當然に御座候、吾れや寸毫の善をなし得べきものに非ざるを、善を爲さんと思惟する蓋し妄想の所爲ならむのみ、過去に於ける吾が罪惡過失、凡夫の所爲として素より怪しむを要せざるなり、然るに陰に虚偽の心を抱いて陽に賢善の相を飾る、苦惱爲めに起り、煩悶爲めに生ず、何處に慰安の餘地あらむや、噫、眞に吾が罪惡を憐れみ吾が苦惱を救ふものは唯一絶對の如來なり、吾が心更に憂ふるの要を見ず候、確信此に至りて余が從來の人生觀全く前後轉倒し、昨日の苦悶は忽ちにして今日の歡喜と變じ、悔恨せる過去の過失は悉く現在感謝の材料と化し、朝な夕な余を苦しめたりし憤恨の涙は、今は思ひ出づるだに嬉しき感謝の涙と相成りしは、自らも不思議の靈感に打たる、計りに御座候、吾等凡愚を憐み給ふ如來の慈心何ぞ斯の如く廣大なる、過去半生に於ける吾が脩養努力は、自力無能を自覺せしめて吾が身を救はむず如來の御計らひなりけりと思ひいたりては、たゞ々々難有涙のこぼるゝのみに御座候。

特に感謝す親愛なる吾が友よ、余は君によりて一年の苦痛に惱み、君によりて永遠の慰安を得たり、君は誠に余が救命の天使なり、君なかりせば余は未だ如來の救濟を得ずして永く苦海の迷兒たりしならむ、吾れ今したゞ君を思うて感慨無量の涙に咽ぶのみ。

王舍城悲劇の主人公阿闍世が其の父、頻婆沙羅王を殺害し、母韋提希夫人を幽閉し、彼が命終に臨んで全身瘡を生じ、墮獄を怖れて苦悶惱亂、日月稱等六大婆羅門の慰藉に安んずる能はず、最後に耆婆のすゝめに従ひて佛の所説にあひ、汝父を殺してまさに罪あるべくは我等諸佛また理あるべし、若し諸佛世尊を得ることなくば汝獨り如何んぞ罪を得んや、との佛言を聞き、立どころに一大慰安を得、勇躍歡喜して絶叫して曰く、

世界我れ世間を見るに、伊闍子より伊闍樹を生ずるを見る、未だ伊闍子より伊闍樹を生ずるを見ず、而して今伊闍子より伊闍樹を生ずるを見たりき、伊闍子とは我身是也、伊闍樹とは我心無根の信是也、世尊、我若し如來世尊にあひ奉らば、當に無量阿僧祇劫に於て大地獄にありて無量の苦をうくべし、我今佛を見奉る、この佛を見奉りて得たる功德を以て、衆生の煩惱惡心を破壊せしむ、世尊、若我明かによく衆生の諸の惡心を破壊せば、我當に阿鼻獄にありて無量劫の中に諸の衆生のために苦惱をうけむも以て苦とせず、

噫、目前墮獄の苦患に戰慄懊惱せる彼阿闍世、衆生救濟のためには阿鼻獄に墮せむも以て苦とせずと絶叫せる、何ぞその確信の堅牢なる、何ぞその慰安の横溢せる、吾れこの阿闍世の告白をき、胸中油然として慈光を感得し、半生の苦惱頓に滅して疑懼不安の念なく、天地廣大、四海平等、靈光徧滿して一物の障ゆるものなきを直覺し、阿闍世と共に勇躍歡喜、思はず案を叩いて飛び上がり候。

吾れ如何なれば斯くも自ら誤れる、吾れに罪惡あらざれば如來の救濟あらざるなり、五劫思惟の本願は惡人正機といふに非ずや、曇鸞道綽多年の修徳を棄て、他力淨土の妙門に歸し、法然親鸞豐富の學殖を擲て至信念佛の一道を辿る、吾れ自ら計るを知らずして僅少の辨道に誇り、古聖を學んで自ら

雜行を棄て、救世の願船に托乗せる吾れなれば、何事も如來の御計らひ自ら思議すべき事には候はず、深く救濟の實驗に佛智不可思議を確信して唱名念佛するのみに御座候。

大願海のうちは

煩惱のなみころなかりけれ

弘誓のふれにのりぬれば

大徳の風にまかせたり、

超世の悲願きしより

われらば生死の凡夫かば

有海の磯身はかばられど

こゝろは淨土にあうぶなり。

この消息こそ吾が現今の胸中を實寫して遺憾なきものに御座候、余はこゝに過去經歷の跡を顧み、救濟の實驗を叙し來りて感慨更に一段の深きを加へ候。

敬愛する三好先生足下 余は此に謹みて余が苦惱の經歷を、厭はて聞き給へる先生の厚意に對して深厚の感謝を捧げ、且つ目下の余が歡喜慰安をの一端の消息を達へ得たるべきを信じて非常の満足を覺ゆるものに御座候。

時下日を追うて嚴寒の候に向はんとす、大光照護の下色心の御雄健ならむことを祈上奉り候。 南無阿彌陀佛

於東都求道學舎

佐々木哲郎

三好愛吉先生御机下

# 宗教は自覺なり

求道學人

物を食ふて居る中は、腹のふくる、ことも知らず、飽食する、食ひ過ぎたことを悟るのは、何時でも食後の事である。或は抱腹の苦みを覺てか、或は食傷の結果かに促がされて、漸くに自分の食過ごしを思いつく、けれども時已に遅して、何も役に立たぬ、食傷程のことならば、大したことはなけれども、世の萬般の事に於て、何時でも誰でも、かゝるあやまちを爲るのであるから、世には苦しみの種絶ゆる時なく、悔恨の涙乾く處とてないのであらう、今や吾々の知識の中には、生理學や衛生學がある爲めに、食傷など幾分か防ぐことが出来る如く、吾々の一生、人類の生涯の前にも、矢張り豫防的の知識があつたならば、幾分か人生の苦痛や悔恨を減らすことが出来なければならぬ、して見ると、今日吾々が求めあつて居る、所の宗教は即ち夫れであるまねか、生理學や衛生學が肉身についての自覺の學問であるならば、宗教は人生その物について、の自覺といふに何の妨げがあらうや、

大海原を前にして、波打よする岸頭に立つたことのある人は、恐く誰でも経験したであらう、天と水との間に唯一人は、自分が立つて居て、僅かに心情を通して居るやうな、又宇宙の一角に立つて居る自分は、僅かに兩足で地面と接觸して居るやうな、又は自分の身も心もなげに、天地一體の如く渾然として同化し去つたやうな、心地がするのである、かゝる

時に、吾々は最も明かに、自分の存在と又自分の身心とを感ずることが出来る、唯感ずる計りてない、實にこの時ほど自分の姿が認められ、心強くも又健氣に覺ゆることはないものである、人一度この境の幽致を味ふたならば、それは決して忘らるゝものでない、匆忙の中に處しても、雜間の市井に住んでも、心神を將てこゝに逍遙することが出来るのである、之を宗教で言ふときには、自覺となるのである、かゝる心身一致の妙境は、必ずしも大海原の岸に立つに限らぬ、木蔭くらす深林の中でも、又は灯火なき暗室の中でも、又は野の末でも寂しき小村でも、試むることが出来やう、畢竟吾々が、大空の真中に豆のやうな小さき月の光りを仰ぎ見るが如く、大小相隔ること遠ければ遠いほど、物の有様がよく見らるゝ道理故につまり、吾々が天然の大景に擁せられて立つので、かくも明かに自分の姿を見得るのであらうから、五尺の小身をいつさげては、比類なき大景に、没入すればよいのである、この莊嚴至れる人生に於て、只自分の足音の外何も聴くことの出来ぬ人間は、五尺の我身にほこり高ぶる心の人である、如來の光明をも感得せず、佛陀の芳烈をも預り知らざる人である、あはれむべきことか。少年の時に、太閤秀吉や西郷南洲をあがめて居つた頃には、自分の力の劣れる、小さきことを自覺して居た故に、崇拜のうつくしさをも現はし、讚美の歌をも捧げたのである、そうして、吾々は限りなき渴仰の情に燃やされて、信と望との歳月を樂んだのである、

なさが如くに、ほこりたかぶる、さればこそ、尊きものは我眼を遠かり、よき音は耳を離るゝ、群生を慈しむ温き御手も、吾々の身体には觸れなくなる、そうして善惡邪正のけぢめが日夜に吾々の耳目を驚かし、賢善精進の相は時々刻々の如くに吾々の心を騒がして居る、かゝる身に靜かなる心宿らるべきにあらねば、ひとり戸惑ひせるわが心は、ひた憐りに憐りて、賢しきを輕しめ、如來を罵るやうになつて來るのであらう、あゝ天地は悠々として變らぬけれども、少年と青年との隔りがかくの如く大きくなつて居る、如來の光明は宇宙に遍満して大悲ものうき時とてなけれど、昔と今の違がかくの如く甚しいのである、かくの如きさまは、吾々ばかりではない、世界人間のあはれむべき有様は、皆このやうであらねばならぬ。

すべて、吾々が何事に就ても、補足の道理を見るのである、たとへば、貧について考ふるときには、同時に富についてのある觀念が伴ふて居る、それは富の觀念がない人には貧といふものゝ觀念が出来ぬ譯であるまいか、惡の觀念の定まれる人には、必ず善といふものゝ觀念も裏面に伴はるのである、丁度この道理が、宗教の上にも見らるゝ、即ち人身の頼み難き、敢果なき、小やかなる、卑しきものなることを感じて居る人には、必ず何等かの、頼むべき、永遠なる、偉大なる、尊重すべき、あるものを認めて居る筈であるから、宗教の信仰を以て絶対如來に歸敬し、親近して居る人々は、必ず自分についての自覺を持つて居るのである。この自覺がある故に、彼は信と望との生活を續けて行くことが出来る、

そうして已にこの信と望との生活に入つて居る人には、何事も光明あり生命ある所の物となるのであるから、宗教の信仰を有する人には、信も望も、それは唯の名辭ではなくて、ある人格的靈体の如くに、力と感化とを及ぼす、即ち「理想は人を靈化す」といふのは、唯宗教に於ける理想を言ふのである、されば少年の時に、一英雄の如くに夢みたる釋尊も、今や信仰の眼には、決して三千年の歴史の上の偉人でなく、丈六の金身に接するの想を以て日夜に讚仰するのである、況してその金口に出でたる經文の教律は、唯紙面に印せられたる空文字ではなくて、如來一音の御演説の如くに響き渡るのである、親しく學道し、子細に參徹せば、迦葉不滅のみにあらず、釋迦もまた常住なり、故に釋迦の肉身今猶暖かに、迦葉の微笑また更に新たならむ、——「羣山傳光錄」と言はる眞箇の消息があるのである、

自覺せる人の生活は、信と望との生活であるから、つまり意味を有する生活である、信仰なき以前の生活は、何の意味もなく、方角もなく、誰に導かれたりもなく、何を自當てにしたてもなく、謂はゞ自然力のまにまに生きて來たゞけてある故、本能の生活に過ぎぬ、かゝる生活は輪廻の生活である、しかるに今信仰を得た時に於て吾々は初めて人生に立場を得た、土王が石を積んで壁の土臺にする如く、吾々は自覺の立場を得てこれから光明の生活に進むのである、世の善惡邪正も、好意も惡意も、生も死も、尊も卑も、皆この自覺の立場からして初めてその意義を存養する、父より離れて一家を經營する子が、これから自分の財産を積むが如きものである、

る、エマソンが、世の偉大も善も美も真も、唯如來を信ずるによりて定まるのみ」と言へるは即ちこの消息を示したのである、

今日吾々の讀む書も、學べる教師も、未だ嘗て一度もこの人生の根柢たる自覺をすゝめたことをさかぬ、しからば、吾々が今この根柢を自覺することなくして、何を積み何を成せんとつとむるのであらうか、砂の上に築かれる都城は、波のまにまに揺ぎ崩るゝが如くに、吾々は今砂の如き腦裏に向つて、知識の都城を築きかけて居るならば、畢生の努力も何の寸効を生せぬではないか、老哲トルストイ翁が、人生に宗教ありて、初めて諸科學も哲學もそこに其根柢を得る」と喝破せられたる所を併せ考ふるときに、吾々は一日も早く、この自覺の門へ駈けつけねばならぬではないか、  
宗教は即ち自覺である。

### 友に與ふる書

鶴田 耿介

拜啓。時正に身心澄み渡る晩秋誠に宗教上の修養に好期節と信じ候。道兄にれかせられても此際何卒信仰の活火を一人なりとも多く御躰ぎ下され度候。元來我が三河はやゝもすれば昔よりの、習慣的教權の安心に陥る人多く、一向に活氣あり血ある信仰起らざる様子相見へ候は遺憾のきわみに候。之に引かへ東北に於ては現時盛んに他力信仰の活火もえ上り

酒も呑み少しは墮落して、多くの人と面白可笑しく世を暮らす方が策の得たるものにあらずやなど途方もなき事も考へ候。此時には未だ宗教などいふものは誠につまらぬもの、愚夫愚婦に地獄極樂を説き聞かすものとのみ存じ居り候ひしが、慥か高等學校第二級のはじめに候。ふと今迄本箱に打すてありしバイブルを眞面目によむ氣に相成り候。是が抑々小生が宗教に入りし初めに候。それより眞面目に神に祈禱をさし、専心信仰の門戸を叩き候へ共、神や來らず祈禱は無意義に終り申し候。信仰なき祈禱は信仰なき唱名と均しく誠に苦しさものに候。かく自己の心さみしさに夜衾を擁して泣きしことも有之候。クリスト教は遂に煩悶の小生を救ふに至らず、神は愛なりとのヨハテの福音は遂に小生の心裡に透徹する能はず、神は天地の造り主にまします、世界の萬物を司どり玉ふとの念先になりて、愛を感得することを得ず。前途は暗鬱として一道の光明なく、心は冷やかになりて沙漠の如き感致し候。此時の心情を寫せし文隨筆集なる名の下に小生の篋底に有之候、其一節を左に記載致す可く候。

……故郷は人生の樂土なり、一樹の影、一河の流れ、見るもの聞くもの皆懐舊の情を荷ふて、樂しき言ふ可らざるものあるなり。然れ共其故郷のホームにして不健全なるものならば――學あり習ある青年は如何の感をか起す。人生の悲慘之より甚しきはなし、かくの如き位置にありかくの如き境遇に叩つものあらば、余は万斛の血涙をそそいで同情を表するもの也。嗚呼温かき愛の何物なるかを知らざる青年！春風徐に花を吹き渡る如き美ある愛を解せざる青年！我れ會々故郷にかへりかの三界身をおくに家なき青年の身を思ひ涙潜として禁ずる能はず。さるにても愛の化身なる全能の神よ、御心に叶はゞ天を怨み人を厭ふの悲惨なる青年の胸に愛の芽を萌さしめ玉え。

つゝある由、近角先生數々申され候。西尾にも青年佛教會有之候由、せめては是等の人々が熱烈なる信仰湧き來らば、大法のため一しほ喜ばしく候。幾度拜讀しても難有きは嘆異抄に候。中にも第三章最も切に身に感じ申し候。左に小生が今日迄の宗教的經過を御話し致し道兄に御禮申さねばならぬこと有之候。

抑々小生が初めて宗教の門を叩きしは、切實なる罪惡觀を感じ、其爲め非常なる苦悶に打たれ、如何にもしてそれを脱せんとしてしが原因に候。此罪惡觀を抱くに到りしは家庭の事情より小生が心全く正當の發達を遂げざりしに基づき候。小生は宗教に入りて罪惡觀に陥りしにあらざり、宗教に入らざる前より苦しみを感したることに候。此苦しきは中學の二年頃より初まり、年をふるにつれて深さを増し、金澤第四高等學校に入るに及びて、最高潮に達し申し候。心内には春風の如き樂しき心少しもなく、只仇恨、妬忌、忿怒、邪情等あらゆる惡情充滿して、他人を見るに他人を以てし、自分ながら恐ろしき程に候。如何にもして此汚れたる心を清めんと、すればする程きたなくなりまさり、學校にては教授先生の講義半ば耳に入らず。人に對すれば不快の念立るに萌す等小生の如き惡人(精神上)は世に又となしと思ひ、心中の寂寥たふるに物なく、果ては此苦しさを除かんため、否到底除くことは得ずとするも忘れんため色々の事を考へ申し候。一例をあげれば、運動を盛んにして身体強健となれば、健全なる精神は其自体に宿る筈、と可笑しけれど一日に牛乳を一合卵を一つつゝ呑みしことは事實に候。又小生の如き眞面目なものは

道兄よ、文中青年とは小生自らをさしたるものに候。此時に當り層一層の苦悶を増せしは道兄が毎號余に寄贈し玉ひし「精神界」に候。クリスト教は先入主となりしかも信仰を得ずその頭に「精神界」の如來の教は用捨なく注入されて一方には神、一方には如來、何が何やらさつぱり分らず更に渾沌たる有様を増し申し候。元來小生の友には禪宗の寺に生れて遊學せらるゝ人々多く、従つて曹洞宗の經文修證義など連りに勸められ、又其間には曉鳥敏師が道友會にて、嘆異抄を講ぜらるゝあり。小生の腦中にはクリスト教と精神主義と自力主義とが割據するやうに相成、少しも慰安を得ず。かくして過ぐることに二年餘り、今夏よりやや眞宗に傾き、道兄より近角先生の「信仰の餘瀝」を頂戴致し、衣浦水清く松青き處にて精讀致し一々胸に當る感致し候。中にも宗教的同胞、佛の人格、佛陀を近きに求めよ、の三章は難有く精讀仕り候。しかし先生の所謂始ありて終なき佛どししても合點ゆかず、九月上旬文科大學に遊ぶこと、相成候。今夏道兄が小生をば浩々洞に寄宿のと御依頼下さるや、小生はもし如來てふ慈悲に満ち玉ふお方ましまさば、かく迄に苦しめる小生をば必ずよきに導き下さるならん、されば浩々洞の諸兄は必ず余を救ふの人ならんと信じ候。然るに色々の都合ありて拒絶せらるゝに及び少からず失望致し候。其時には未だ當學舎に入ることは夢にも氣付かず、湯島新花町の朋友の下宿に至り當地下宿屋の無趣味を見るに及び、ふと當學舎のことを思ひ浮べ、先生に御願ひ申せしところ直に承諾下されたる次第に候。近角先生は今春第四高等學校の富山、三矢、多田氏等の盡力により開かれ



し釋尊降延會の時御演說遊ばされ、それを承りたるが縁と相成候。小生が當學舎に入りてより間もなく浩々洞は眞鴨村に移轉致され候。さきに小生浩々洞に寄宿を承諾されしとするも眞鴨より大學に日々通學する豈に容易ならんや、然らば浩々洞は辭し學舎には機晩れて入るを得ず、全く無趣味なる下宿屋の人とならざる可らざるに立到りしことに候。御承知の如く近角先生は罪惡觀の苦悶より他力絶待の信仰を稔得遊ばされたることに候へは、同じ罪惡觀に苦みし小生は、近角先生の仰せらるゝこと一々合點あり候。忘れもやらぬ十月二日、佛間にて朝の勤行を終はりし後、小生は先生より始ありて終なき佛様のことを承り多年の宿疑忽ち晴渡り候。其日の日記に「ア、今日は如何に幸多き日や。煩惱消えて頭すがすがし」といへるもの即ち之に候。小生の今迄の罪惡觀や、苦悶や、基督教や、精神界や、信仰の餘瀝や、道兄や、先生金の澤に來玉ひしことや、皆如來の大願海に引入せしめ玉ふ方便に過ぎざりしと固く相信じ候。小生夕陽時に西山に入らんとするの時、雲に日光反映して美しき五色の彩を寫し、却つて一層の美を増すを見候時に、罪惡も苦悶も如來の大慈光に照らされては只感謝あるのみと觀じ申候。

小生はこゝに改めて道兄が精神界、嘆異抄、信仰の餘瀝を送られしことを厚く御禮申上候。

道兄よ左に小生の切愛する和讃四首を掲げて擲筆致すべく候。

光明の天夜をあらはれみて、  
法身の光輪きはもなく  
无得光佛としめしてぞ、  
安養界に影現する。」

が、しかし時として不平を洩すこともある。溺れたるは自身の業である。暗礁に乗り上げたるも、正しく自己の然らしむる所で、今更彼を怨み此を悲み、若くは天に訴へ地に泣くことも要せざるのである。

過ぎたるは及ばざるが如しといふ。勇も過ぐれば暴となり、愛も過ぐれば溺となり、儉も過ぐれば吝となり。洵に其中庸を得て進むことは困難である。古人も歡樂極まりて悲哀多しといふ。樂み盡きて悲みの雨を見るは屢々實驗する所なり、月の滿つるはやがて缺くるの準備である。勢ありとて猥りに飛び上がるにも及ばぬ、容よとして誇るべきではない。其中庸を保つことはやがて世に處する緊要の道である。蓋し人は失意の境に在りて身を處するは比較的容易であるけれども、一たび得意の順風に乘する時は、前後左右を顧みず、全く自己の缺點を打ち忘れて、盲進するのである。たゞそれ盲進なり、友の困難を見る、敢て路傍の乞食を見るが如く、恬として知らざる態度をとり、自己に阿附するを以て我に上天の翼を附するものと思ひ、却て高慢の鼻を高めるのである。災の起る、起るの日に起るにあらず、失意の淵に沈むは一朝一夕の所業ではない。必ず沈まねばならぬ運命は前々より起りつゝある。失意の境を悲むにあたりて回顧一番得意の順境を檢し來れよ、悚然として自己の缺點の多きことを感じ、又は人に對して如何にも慘酷であつたことを一々胸中に思ひ浮べざるを得ぬ。如此淺ましきものが、失意の淵に沈むは寧ろ當然にして、今まで沈まざるのが却りて不思議のやうである。

抑々得意の高潮に達した時は、逆境の底に沈むの準備であ

煩惱に眠さへられて、  
大慈ものうきこさなくて、  
超世の悲願きしより、  
有漏の穢身はかはられど  
小慈小悲もなき身に、  
如來の願照りまますば、

攝取の光明みされざる  
常に我身をてらすなり  
我等は生死の凡夫かは  
心は淨土にすみあそぶ  
有情利益は思ふまじ  
苦海をいつてか渡るべき

十一月八日  
佐々木 渡 論 稿

### 順境か逆境か

百目木 劍 虹

空を翔ける鳥が或る機會に觸れ不幸にして一翼を傷つけたりと假定せむか、彼は忽ち地上に墜つるの運命に接するであらふ。吾等の一生も甚た之に類する事が多い。されば勢を得て進むときは他を顧みるの迫なく、輕舉盲動、人を人と思はず、友を友ともせず、自己中心の城壁は巖として胸に横はり、失望の風は曾て我門戸を過ぎしことなしと思ふ時、俄然暗礁に衝き當りて進まむとして進むこと能はず、退かむとして退くに由なく、あはれ一翼を失ひし鳥の如き運命に接することあらば、吾等の悲みや果して如何になりゆくであらふ。此時に際して天を怨み人を仇に思ふは人情の常なれども、もとより天地自然の法則と云ふべきか。將た千古の眞理なるものと云ふべきか、其間に一貫せる軌道は決して一毫一厘も缺損することはない。水に溺れたりとして水の不完全を咎むるものはない

つた。何事も準備なくして成るものは一つもない。山の成る一朝にして築かれたるものでない、大海の水も一滴より成る。若し人の我を怨に思ふものあらば、怨む人の惡きにあらずして自己の足らざるが爲めである。人の我に對して無情ならば、自己の親切であるかなさかを考ふるがよい。かくして胸に問ひ心に答へなば、一々針もて衝かざるの思ひがするであらふ。逆境もとより悲むべきである。併しながら罪は我にあり、我を責めずして逆境を怨むか如きは、水に溺れむとして水を怨に思ふやうなもので、愚も亦甚しきといはねばならぬ。口でこそかくいふもの、一旦逆境に立つ時は實際心中の波は高く低く動いて悶え苦まざるを得ぬ。多くの人は順境にある時は神も佛も忘れて居るが、一たび逆境に沈むと所謂苦しい時の神頼みといふ工合に、逆境の惡魔をば或力を藉りて之を追ひ拂はむと勉むるは一般の習慣であるが、これ宗教を頼りとせざるものより見れば聊か可なりとせむも、是とて確乎不動の信仰あるではなく、所謂現世祈禱的、乃ち一種の利己主義にして、順境に復すると共に神や佛の力は全く失せ去る輩である。

要するに順境と云ひ、順境と云ひ遠く相離れたものではない。順境を離れて逆境もなく、又逆境を除いたる順境もない。順境を陽とすれば逆境は陰である。逆境を裏面とすれば順境は其表面である。表裏も二あるにあらず、順と逆また不離のものではない。順境に臨みて逆境を忘れず、逆境にありながら泰然として迫らざる工夫が必要である。更に進むて之を考ふるに、始めより順境を望むのが誤りて、順境を望めばこそ逆境

に沈むの愛ひがある。金なればこそ失ふの力はない。何事も赤裸々のまゝ、平然として世に處する覺悟なくてはならぬ。若しも往けよと命ずるものあらば水の中、火の中と雖、進むがよい。吾にありては順境も逆境もたえて關する所ではなぬ。兎角順逆の二境を考ふるやうでは自然愚痴を起し、煩惱も起したくなる。人は進むべき處に至らねば結局止まむのである。順境か、逆境か、失か、得か、吾等凡智の測り知る處ではない。此に至りて唯佛與佛の知見あるみ。

愛と慈悲

安部 瑠々

○愛は「アイ」なり、尋常小學一年級が授業の第一着なり、平易で簡單で初歩なり。  
 ○慈悲は「シ」なり、清音を學び終つて濁音にかゝりたる時なり、「アイ」時代より進歩したるなり、複雑なり。  
 ○自分よりは下のもの、例へば猫を愛するも愛なり、犬を愛するも愛なり、婢僕を愛するも愛なり、自分より上のもの、親を愛するも愛なり、君を愛するも愛なり、師匠を愛するも愛なり、要するに愛は自己を中心として上下二方に働くものなり。  
 ○慈悲は愛とは違ふなり。親が子を愛するは慈悲なれど、子が親を愛するは慈悲に非ず矢張愛なり。師匠が弟子を愛するは慈悲なれども、弟子が師匠を愛するは慈に非ず矢張愛なり。要するに慈悲は自己を中心として下一方のみ限りて働くものなり。  
 ○慈悲は愛を標榜す、初歩なり。愛は上下二方に働く、慈悲は自身より上のものを認めず、常識以上なり。  
 ○釋迦は、天上天下唯我獨尊といふ。  
 ○耶穌は、神のおつかひなりと自稱す。  
 ○釋迦は佛なり。  
 ○耶穌は神の召使なり。

梶を手繰りし月日よ昔  
 十七年は徒勞にぞ過ぎし。

西に東に智恵ある人の  
 哲學學べと諭されたりし  
 教かしこみ懺さつとも  
 辿りし道はいと暗かりき。

人の心を流れてやまぬ  
 同じ悶えの涙の跡を  
 更らに穿たば血潮ぞ涌かめ  
 得てんと樂ふ慰藉なくに。

二

過ぎしも、歳世を金色の  
 光と育てし科學の園に  
 しばし憩へと善き人いひし  
 言の葉追ふて驅けては入りぬ。

天に鳴る神功勞たて、  
 都も鄙も津々浦々も  
 なべて開化し過ぎ去し方や  
 思へば夢と變りし浮世。

人の智恵には及ばじものと

風尚餘韻

回顧の賦

木曾 紫光

あゝいざらば浮世を後に  
 しばし回顧の岸邊に立たん  
 よせてはかへす波のうねうね  
 いしくも似たり人の世のさま。

巖に狂ふ波をし見れば  
 逝きてかへらぬ定業と思ひ  
 木の葉渦く水をし見れば  
 あまりへだてぬ女波と男波  
 八重の潮路とうつりてやまぬ  
 人の浮世の流を汲めば  
 たねて動かぬ趣こめて  
 迷ひの波は彼岸にうつよ。

一

學の海とふ行へは遠く  
 人の道てふ千尋の深み

星の光も溪間の水も  
 思ふまに／＼従ひつれど  
 人てふ我は不安に泣きぬ。

三

ひと夜冥想の枕邊ちかく  
 淨き翁の手にいざなはれ  
 遙に登りし無邊の天の  
 玉の宮居に世をかへり見し。

血潮流して刃を抜きて。  
 修羅の巻はかくぞ荒め  
 ひゞく砲音矢叫の聲  
 とはにたえせぬ我がふる郷や。

四

書にかゝれし文字をたよりと  
 明日を知り得ぬ浮世の子等は  
 昔の人の涙をたづね  
 貫ひ泣きして踵を追ふよ。  
 いつしか還りし人の世の秋  
 霜に凍るべき迷の夢の  
 虫の音のごと淡くは消えて  
 かへりみすれば趣味ある態や

地球の外に我が立つ臺  
ゆたかに通ふ無碍の神風  
思ひかへせば浮世は花の  
香氣ゆかしき嵐毘尼園や。

涙をとめし哲學の書  
鳴る神捕へし科學の力  
不安に悶えし我が文反古も  
今はあかしき片身となりぬ。  
あゝいざさらば浮世を後に  
しばし冥想の臺に立たん  
淨き翁は光明をはなち  
つきぬ救済の御名をし垂るよ。

あゝいざさらば浮世にかへり  
今し回顧の園にぞ立たん  
みどりの柳くれなゐの花  
千紫萬紅あなるわしや。

野邊の白百合粧こらし  
天空行く鳥のしらべは妙に  
こゝに趣深かる光榮や  
天地は復活ぬ、とことのはの春。

親鸞聖人の御筆跡の石ずりを  
見奉りて作れる歌

甲 之

この文に向ひまつればいにしへの大き聖を目に  
見たてまつる。  
この文に向ひまつればおのづから心満ち足り安  
けくありけり。  
この文に向ひまつれば百あまり五十の文字みな  
生けるが如し。  
ひたすらに愚かのを助けむと書かせ給ひし  
ありがたき文。  
「あさましき愚痴きはまり無き故に」と仰せ給ひしこ  
とのかしこさ。  
世の中の事痛き文の八千巻はあらずありとも  
吾はなげかし。  
文を読む机の上の文の上にこの文ひろげ  
歌文つくる。

歌作らむと強いて作れる歌

み佛のみをさけばみ佛の慈悲しみくりに  
涙しながる。  
み佛のみをさきて御名をよぶ老人見れば  
涙しながる。  
み佛のみをさけば秋風に林の木葉

驚く思ひ。  
み佛のみをさけば琴の緒にこもるひじきのなり  
出つる思ひ。  
八千尋の谷のかけ橋行きつゝも憂起らずみ名  
唱ふれば。  
松の葉の葉末の露の散るごとく憂止みけりみ名  
唱ふれば



雀来て茶山花のはなこぼしけり銀杏落葉の  
散りしく上に  
はさあつむ落葉の中に茶山花の落花の白さ  
赤さまぢれり

耶

誰か知るべき秋の葉の  
落ちて清水を埋むさき  
重く音なく塵の下  
溢れて流るものとしは。

誰か知るべき片里の  
風にそよぎて立てる木の  
黒く淋しく中津川  
うつりて流るものとしは。

知る人もなき山里の  
枯れゆく木とは思はれば  
秋を笛吹く寂しさな  
かくれがとこそ頼むなれ。

星々やける秋そらの

光は落ちてしるがれの

帯の如る此流は

未來永劫盡きトッし。

經文に見えたる樂器

志 水 文 雄

若使人作樂 擊鼓吹角貝 簫笛琴瑟篔  
琵琶鏡銅鈸 如是衆妙音 盡持以供養  
皆以成佛道

笛

和名がフエで吹枝の義、管笛の總名である、此に曰ふ笛は  
支那の横笛又は龍遠と云ふのを指すので、即ち今日我邦に傳  
はる所の雅樂の内の唐樂に用ふる横笛の事、法華經方便品に、簫  
笛琴瑟篔。佛本行經十四に一千具笛。普曜經一に、大鼓小鼓  
琴瑟箏篔。涅槃經一に、箏笛箏篔など、いくらかも出てゐる、  
笛は諸國共に最古から存する樂器なることは言ふまでも無  
い、支那では黃帝の時伶倫に命じて嶰谷の竹を以て黃鐘の宮  
を造らしめたと云ひ、我朝天窟の變に當て、天鈿目命が天香  
山の竹を採り、節間に風孔を雕りて吹いたのが神樂笛の起  
原となつた如きである。和名抄に律書樂圖を引て、横笛本ト出

於羌也、漢張騫使西域一首傳一曲、李延年造新聲二十八曲、蓋前漢武帝之世に張騫が西域を征服した時に傳へたる樂器であることが明である。今傳はる所の器は七孔、吹口を加へて八孔、長さ一尺三寸二分八厘、尾端の徑四分厚さ一分二三厘である、孔名は干平調、五下無、上雙調、夕黃鐘、中繼涉、六壹越、下上無である、此器の初て本邦に傳へた年代は詳でないが上代の事なるは明である、樂書に尾張濱主を此器の傳統の祖とする説は、濱主が初て傳へたのではないとして、彼が非常の名手であつたので特に推して横笛の祖と尊だのであつて、器の傳來は遙かに早かつた事は天平勝寶八年錄する所の東大寺獻物帳、寶龜十一年の西大寺資財帳等に横笛の古名器が記されて居るにても知れる、又大寶令に唐樂師十二人、樂生六十人とある、それを類聚三代格にある所の大同四年三月廿一の官符に徵するに、唐樂師十二人の内一人は横笛師であつて、嘉祥元年九月廿二日官符に據れば、樂生六十人の内四人が横笛生であつた事がわかる、是等を見ても傳來の尙しい事が明かである。次に

笙

八音に於て竹に屬する樂器で支那傳來の器である、伏犧が始めて造つたといひ、女媧が造つたといひ聲が造つたのだとも傳へられる。竹笛を編て體となし木を以て帶とする樂器で信西入道古樂圖に出てゐる、器に大小あり管に多少あつた事は、爾雅釋樂の郭璞の註に、大きいのは二十三管長さ一尺四寸、小さいのは十六管一尺二寸、風俗通には十管長一尺、博雅には大なる者は二十三管底無し、小なる者は十六管底有りと見えて爾雅の説と同じである。三禮圖の説も殆同である、けれども此外に十二管十三管十七管十八管二十一管二十二管二十四管の器も有つた様である、格致鏡原に韻蕭、歌蕭、燕樂蕭、教坊蕭、唱蕭和蕭などの名を載せてあるのを見ても、各其制を異にしたのが有つたらしい、本邦に傳へたのは

いふ、但し也言の二管の簧は今傳はらない、凡そ笙は五管或は六管を合せて次ぐのであつて是を合竹といふ、即ち和聲を用ふるのである。又簧に主従の二音があつて、乞一工凡乙下十美行比の十音が主で、あとのが従である、例へば乙音を吹く時には乙の管を主として、七行八十千の五管を従として合せ吹くが如きである。さて佛本行經十四に一千具笙、同く十五に笙瑟箏、陀羅尼集經十二に長笛箏箏筆箏など、見えて居る。本邦樂書に堀川關白(昭宣公)を笙の傳統の祖としてあるが此時始て笙が傳來したのではない、濱主を横笛の祖としたと同じ理由で、最も此技に長した人だから推して笙の祖と化したのである、器の傳來は遙かに上代の事で、合笙師一人合笙生四人といふ事が令格に出て居るのでも知れる、次が

笙

これもやはり匏屬の樂器で讀む、我邦にも傳へたことは事實であつたが、程なく傳を失ふて仕舞つたので、形態も聲調もよくわからない、やはり支那の樂器で隋が造つたのだとも、又漢武帝の時師仲が三十六管の笙を造つたともいふ、周禮に笙師掌教吹笙とあつて笙とは、律の具合を同じくしてあつたものと見える、韓非子に齊宣王が此樂器を好たことが見え、史記蘇秦傳にも見えて居る所から見ると中々古くから行はれたもので、武帝の時に師仲が造つたとは受取れない、説文や廣雅に據ると笙は三十六管で長さ四尺二寸、風俗通に今二十三管と見えるから、是にも時代に依つて管數に損益があつた事らしい、此器が本邦に傳へたといふ證據は、東大寺獻物帳に吳竹笙一口、西大寺資財帳に斑竹笙一口とある、令格に笙師笙生の名の無いのは、餘り行はれなかつたと見える、體源抄に斯う見えてゐる

通憲ノ云、笙ハ東大寺ノ寶藏ニアリ、勅使タリシトキ見レ之、長ク、レトモ管ノカズハ笙ト同シト云々

彈定殿下仰云ク、故殿ニ宇佐大宮司ガ進セシメタリシト申テ見セ給ヒタリシハ又云

その何れであつたか分明でない、和名抄四に、簫者編管而吹也、但其長短不同、參差之義是歟云々と云ひて本邦所傳の管數を記さなかつたのを見ると、此時既に其傳を失ふたことがわかる、簫が我國に傳へられたのは奈良朝の時であらふ如是我國一時盛に用ひられたといふことは東大寺獻物帳に、廿竹簫一口楸木帶、西大寺資財帳にも簫一口と見えてゐるのみならず、令に唐樂師十二人樂生六十人とある、是を大同嘉祥の兩官符に據ると、簫師が一人、笙生が二人であつたが、嘉祥元年に一人に減ぜられたことがわかる、此後程なく亡佚して仕舞つて今日からは形態も聲調も知ることが出来ない、惜しい事だ、さてお経に見えてる二三を擧げると、法承方便品に簫笙琴瑟、大樹鬘那羅王經二に以此等樂器、笛音及妙歌音云々、佛本行經十四に一千具、蕭、十誦律三十六に箏箏琵琶、いくらも見えてゐる。

笙

笙は前の簫とは全く異なる樂器で、八音に於ては匏に屬する器である。和名抄に釋名を引いて笙音生、俗云象乃布江、竹之母曰匏以瓢爲之、横施於管頭曰簧以竹鐵作之、今案有二十七簧、とある。亦支那太古の樂器で女媧が造つたといひ、隋が造つたともいふ。鳳笙、隋笙、合笙はその一名である。笙の製も古今時に依て異にした様である、爾雅に、大笙謂之巢、小者謂之和。郭璞の註に列管匏中一施簧管端、大者十九簧小者十三簧、説文には十三簧、三禮圖にも十三簧の名を記してある、文獻通考に、十九簧至二十三簧、曰笙とあつて、時に依て損益があつた者と見ゆる。我邦に傳へた者はその内の十七簧の器のみであるので、形態は今現に存じて居るので人の知てゐる所であるから言ふまでも無い。傳來の年代は詳でないが、唐樂は文武天皇以後常に之を奏したことから當時すでに此器を傳へたものなる事は明である、管數通計十七、その名を千下乙工美一八也言七行上凡乞毛比と

高ハ長ク、テ竹ハカズハ笙ト同シカリシナリト

されば長さは明でないが管の數は十七本であつたのだ、長さか記して無いから分らないか、三尺乃至四尺位の長さがあつたものとすれば、笙よりチグターブ低い音を發したものであらうと思考する、猶博雅の教を俟つ外は無い、さて、佛本行經十六に、琴箏琵琶笙箏と見えてゐる。

長笛

是も漢土傳來の樂器で、チャウチキ又はナガフェといふ、亡佚樂器の一で形態も聲調もわからない、文選に馬融の長笛賦がある即是である。唐六典大樂令に燕樂清涼樂の三部の伎に長笛を用ゐたことが見えて居るから唐代盛に行はれた事が知れる、我邦にも傳へた事は和名抄や教訓抄や伊呂波字類抄などに見えてゐるから確であるが、令格に此名の見えないのは、殆く行はれなかつた故らしい、狩谷掖齋の箋注和名抄に長笛於皇國古籍無所見と曰ひ、歌舞品目にも言及ばなかつたのは其に失檢である、それから又續教訓抄に長笛を神樂笛(太笛)の一名としてあるのは勿論諺である、陀羅尼集經十二に次清樂兩部長笛箏云々、大乘金剛髻珠非修行分に長笛方響諸樂器と見えてゐる。

笙

は和名シヤウノコト、又サウノコト、或は單にサウと呼ぶ、現在樂器の一である、支那傳來の器で秦の蒙恬が造つたといふので又秦笙の名がある、桐を以て製し上崇く下平に中空しく、方今俗等と大差がないが、古制の笙は長さ五尺五寸であつたのを、韓儀帝改めて六尺五寸とせられ、其後また一寸を減したといふことである、純喜式、體源抄にも六尺四寸と見えてゐる、又六尺二寸七分に達する者もあるといふことである、首の潤さ八寸二分五厘、尾の廣さ七寸八分許、絃は木十二條であつたのを一絃を益して十三絃となつた、その名も俗等と同じく一二三四五六七八九十斗爲申といふ、柱の高さ三寸、上下して曲調を作すのである、器の面を謂といひ俗に申ともいふ、背を龍背、腋を鸞といふ、其外龍角、遠山、龍

鼻、龍頰、龍頰、音穴、金戸、三嶽、龍尾、滑、龍吻、木度、など様々の名所がある、樂家の傳に依れば、承和年中遣唐列官藤原貞敏によりて始て木邦に傳へたといふけれど、大寶以來第一入學生三人後二といふ職のあつたことが格式に見えてゐるから、器の傳來は決して承和の時ではなくして早く奈良朝にあつた事が知られる、貞敏は浪主の横笛に於ける如く絶倫の名手であつたが爲に推して琴祖としたのであらう、爾來禁中の宴享より王臣の小燕に至るまで、之を風箏横笛琵琶に合せ、或は大鼓羯鼓鼗鼓を加へ、即ち管絃なる者が永く典禮となつて現今に傳はるに至つた、箏の名器として古來名を知らるる者に秋風、大小螺鈿、師子、岩越などがある。さて普曜經一に大鼓、小鼓、箏、琴、瑟、琴、木行集經に一千具箏、正法念經五十二に箏、齊鼓、箏などいふも見えて居る。

琵琶

俗名がビハ、又ビハノコト、ヨツノヲゴトと呼ぶ、亦現存樂器の一である、一名琵琶、國腹、三五、胡琴ともいふ、琵琶譜に胡琴、教録、三五要録などがある、比巴と書くのは省文で、琵琶、琵琶、微波、枇杷は皆琵琶の聲の轉訛である、或は曰ふ琵琶は本と印度ビナの轉であつて、その器も亦印度から出たといふことである、支那の樂書にも胡中より出つたといふてあるから、支那固有の器ではなくて印度から傳へたものであらう、長さ三尺五寸、體圓く頸修く首曲り、彈ずるに木撥を用ふる、面の名所に半月、隱月、覆手、撥面などあり、裏即檀に遠山がある、兩側を落帶といひ、柱を施すところを鹿頸と曰ひ、承絃、反手、海老尾などは是に屬してをる、絃は四條、一乙ク一といふ、柱の數四、すべて二十聲を發する、琵琶は仁明帝の時藤原貞敏貞敏九が入唐して琵琶博士藤原承武から法を傳へたといふので、本邦琵琶傳統の元祖としてあるが、器の傳來は此時に初まつたのではない、琵琶師琵琶生の名が大同嘉祥の兩官符にも見えてをり、東大寺獻物帳に琵琶

堅に懷て兩手を用ひて彈するのであつて、その弾く様子まで古埃及の堅琴と同じである、我邦で堅琴といふのは是である、もう一つ外に臥箏といふのがある形は琴に似て小さく木撥で弾くのである、百濟琴と言ふのは百濟から傳へたので名つたので箏篋師篋生の職は古くからあるし、西大寺資財帳にも載せてあるから一時用ひられたことは明であるか今即亡矣、

琴

宇津保や源氏にキン又はキンノコトといふもあつたので其頃までは雅樂の器に用ひられたが程なく廢絶に歸した、天曆あたりまでは用ひたことが舊記に見えてゐる、後世までも琴を彈たといふことがあるけれども、琴をことと讀んで箏と混同したのが多いから信ぜられない、小督が彈いた時雨のことは、琴のことはではない筈のことの方だ、よく琴と箏と區別して貰ひたい、さて中世以後久しく用ひられなかつたのを、八代將軍吉宗が冷人辻周廣に命じて心越師傳來の琴譜によりて更に雅樂の曲譜を作つて合奏したが、是も程なく中止になつた、是には色々理由があるが年の暮だから是も中止として置く、さて琴は長さ四尺七寸廣さ六寸(異説を數へる日には大變長くなるから今は延喜式や體源抄の説を記して置く)、首廣く尾狭く上圓く下は方、絃は宮商角徵羽文武の七條、按撫の標的たる徽(俗にいへば甲處)が十三、面材は桐で背材が梓、黒漆を塗るのである、支那では三皇以來彈いたといふ事でも随分古い樂器である、日本に傳へた時代は明でないが、法隆寺に唐開元十二年(總元年)に雷氏の造つた琴が載せられてある、天平勝寶八年の東大寺獻物帳にも二面載てある、降て承平四年の樂器目錄に名器二十六個を列記してある、琴の事は逆も今精しい話をする暇がないから見合せて置く、さて琴の名義内典頗る多く見えて居るので一々例を擧ぐる暇はないが一つ二つをいふと、法華經に蕭箏、箏、大乘窟嚴經下に汝奏箏、般泥洹經下に微風動箏、常出五音、其音滿悲如五絃、撰集百緣經二に、彈一絃琴能令出七種音聲、各各手執瑠璃之琴伴衛左右、修行道地經四に活、用、操、材、三、斯、琴、以、三、板、二、內、空、復、著、好、絃、三、其、音、然、後、乃、爾、聲、悲、和、い、く、ら、も、見、え、て、あ、る、彼、の、二、十、億、耳、に、對、す、る、佛、の、彈、琴、等、は、四、十、二、章、經、や、出、曜、經、や、增、一、阿、含、や、五、分、律、な、ど、に、見、え、て、あ、る、

二面、西大寺資財帳に六面の名器を載せてあるのを見ても、奈良朝すでに傳來したことがわかる、陳氏樂書に八十四調、夜鶴庭訓抄に二十六調の調名を載せてあるが、今存する所の者は、雙調、黃鐘調、返風香調、風香調、水調、平調、返黃鐘調の七調のみである、立上、牧馬、青山、井手、滑橋などの名器は古來朝家の寶藏する所の琵琶である、さて法華方便品に琵琶、鏡銅鼓、佛本行經十に琴筑琵琶篋螺、陀羅尼集經二に長笛簫笙篋篋、琵琶擊竹云々。

五絃

佛本行經十に、琵琶、五絃、箏、同しく又、一千、五絃とある、五絃委しくは五絃琵琶といふ、一名羯琵琶、造た人の名は知れないが、支那の樂書に北國より出つたといふから西域から傳へた物であらう、其形は琵琶に似て小さい、絃數五、名を宮商角徵羽といふ、この樂器は唐六典の大樂令を見ると、燕樂伎、西涼伎、天竺伎、高麗伎、龜茲伎、安國伎、疎勒伎、高昌伎の八部の夷樂に皆用ひられてゐるのを見ても、一時其だ廣く行はれたことが知れる、我國にも傳はつて東大寺獻物帳に名器の名が出て居る、三代實錄にも雅樂寮の申請に、須く五絃の乘を以て琵琶の欠を補ふべし云々と見えて居る信西入道古樂圖にも五絃の畫がある。

箏

經文にいくらかもある引例するまでも無い、邦語がクダラコト坎、侯又空侯とも書く、漢の武帝が造たともいひ、又誰か造つたか知れないともいふ、概ね支那で出來たもの、様に記してあるが、獨り隋音樂志と、立箏篋出自西域、非中國舊器也とある、蓋し漢武の時西域征伐の結果支那に傳へられたものであらう、此器に似寄つた樂器がムラセース三世(紀元前千二百五十年)の古墳に書かれてあることは人の知る所である、支那傳來の箏篋は長五尺器體が曲てゐて二十三絃ある、

瑟

これも亡佚樂器の一で黃帝嘗て素女をして鼓しむ、自ら其哀に勝へず乃ち破て二十五絃と爲すとあるのが即ちこの瑟で、庖犧が造つたのだといふ事である、爾雅に長さ八尺一寸廣さ一尺八寸、二十七絃、或は二十三絃ともいふ、文獻通考には大瑟中瑟小瑟の數種を載て大小の別があつたことと見える、三十六絃とも二十五絃とも二十八絃ともいふて判然しない、本邦に傳つた事は、東大寺獻物帳に楸木瑟一張とあるにて知れる、令格に瑟師瑟生の名がないのを見るとあまり行はれなかつたらしい、經典に見える事は上文に引用した中にも見えるから略す。

鼓

は革屬樂器の惣名でツバミと讀む、匡の兩面を包むに依て名を得たとも、又ツバミといふ音に起つたともいふ、神代紀に吹鼓と見え、神功紀に菟豆綱の名があるから日本固有の器であらう、支那には七十餘種の鼓類があつたことが通考などに見えてゐる、お經にも鼓の名は澤山見えてゐる、五分律に比丘便作金銀鼓、以是自佛、佛言應用銅鐵瓦木以皮冠之頭、又老女人經に有皮有篋(即匡俗に屬)有入持桴打鼓鼓便有聲とあるので彼土の制も推知することが出来る、さて音樂に於ける鼓は、擊ちて以て樂を節するの器である、

大鼓

經に大鼓聲小鼓聲など見えてをる、雅樂に謂ふ大鼓には大大鼓、荷大鼓、釣大鼓の三種あつて支那傳來の物である、大大鼓は朝廷の盛儀や大社の舞樂に用ゐる者で革面の徑が六尺三寸、荷大鼓は道樂の時に擔はしめて之を擊つので徑が二尺七寸、釣大鼓は篋篋に懸て置くので革面徑一尺八寸、尋常

の舞樂に用ふるのは是れである、大寶令に唐樂十二人樂生六十人の内鼓師一人鼓生十四人あつたので流傳の久しい事が知れる、

佛本行經三十に大鼓聲或小鼓聲、細腰鼓とある、細腰鼓は三種ある、一鼓、二鼓、三鼓、の三を總稱して細腰鼓といふ、次第に大きいので口が潤く中腰が細くくびれてゐて調緒を施してゐる、今日用ひてゐる能樂の鼓と思へば大差はない、細腰に即ちその形状に取つた名である、二鼓、三鼓、併せて傳へない、三鼓一名を腰鼓といひ、伎樂即ち與樂に用ふる器で、一名吳鼓とも云ふ、腰鼓の名も經文に見える、又正法念經に齊鼓といふ名が見えるが、我國には傳へなかつたから如何なる者か知れない、唐六典の高麗使て此の鼓を用ひたことが見える、

鞞鼓

増一阿含などに見えてゐる、鞞の一名で又鞞鼓、鞞鼓とも書く、和名フリツツミで字も振鼓、搖鼓などにも書く、長恨歌に漁陽鞞鼓動地來とあるのは是だ、本邦追儺の古式に是を鳴らして惡鬼を驅逐した事が榮華物語や久安六年百首に出てゐる、蓋し支那の風を真似たのだ、形態をいふと面倒だから小供の手遊に大鼓二つを柄で貫いて、大鼓の兩端に豆の附いた糸を付けてあるので想像して貰ひませう。此外羯鼓や奚鼓鼓や毛員鼓や都曇鼓などもあるが略して置く、

方便品に琵琶、銅鈸、佛本行經十四に一千、銅鈸など見えてゐる、八音の内て金に屬する器で僧徒は法川の具として用ゐる、本邦舞樂で用ゐる者は徑四寸ばかりの小さいので、擊ちて樂に和するのである、迦陵頻といふ樂を舞ふ時に兩手に持て舞ながら擊つのが此器であつて、銅拍子、土拍子、銅鈸子ともいふてゐる、通考に扶南高昌疎勒から出た樂器だといふから西域より傳來した器に相違ない、

方響

陀羅尼集經十二に擊竹、篔簹、方響とある、ホウキヤウ、カウケイと讀む、長さ九寸廣さ二寸の鐵又は銅板で十六枚に律に従て音が違ふのを篔簹に釣り下けて桴で擊つのである、天平七年上道、眞吉備が傳へた事が續紀に出てゐる、今は亡びて傳はらない、佛事に使ふ器といふもの此種の器で石か玉で出来てゐる、

佛說如幻三摩地無量印法門經中に篔簹、鼓、拍板とある、八音に於て木に屬する樂器で、本邦にては百子又檀版と呼び、又拍板といふのは是である、西大寺資財帳に百子八連とある、大きいのは九枚、小さいのは六枚を韋で綴りてカチカチと響つのである、方今清樂器にも此器の遺製が残つてゐる、田樂法師由來記に見えた編木の圖とは甚だ違ふ様である、七十一番歌合に於てある田樂の編木は更に一體してゐるのである、蓋し古制では無いのであらう。(完)

關文字 (一)

南條博士の謹嚴にして濃厚なる著人の知る所。これよりさき大谷會の備しありき。博士も亦出席せられぬ。然るに翌朝當日の幹事は一封の書を博士より受取りぬ。こは驚くべし、我(博士)は昨夜の歸るさ、思はず幹事諸君の勞を謝せずして、歸途に就きたり。電車の車中ふと出て、汗背を濕らすを覺えざりき。改めて此に謝意を表するなりと。一言、一行、如何なる細事と雖、博士の意を留むるの深き概れ如此し。日に社交のうすらひゆく今日、希くは我等博士を以て龜鑑とせむ哉。

政教時報

編輯だより

◎一年また容易に過ぎ申候、本誌改題前より號數を通計すれば、實に百十八號に上り候。顧みて過去を追想して深く自ら足らざるを慚つる次第に候。希くは新春を迎へ來りて一段の勇氣を鼓し益々向上の一路に進まむ哉。

◎さなきだに教界の寂寞を感ずる折柄、渡邊南隱老師を失ひ候、佛教界學者としての人はこれあらむ、而も學徳共に一世に高き老師の逝きたるは眞に悼むべき事候。

◎東本願寺は益々悲境に陥りたりとの報有之候。たとへ財政は悲境に陥りたりとするも、宗門の盛衰には斷して其影響を及すことなかるべく候。

◎乃木將軍は其令息二氏を失ひ候。曩きに將軍の出征するや家人を戒めて父子三人枕を並べて名譽の戦死を遂げたる後にあらざれば、斷して其柩を送るなかれと。最愛の令息而も二人まで失ひたる將軍の心中今果して如何や。國民は滿幅の誠意を捧げて深く將軍に感謝せざるべからず。

◎今や我同胞は滿洲の野にありて、風と戦ひ、雪と戦ふの外、敵と戦はざるべからず、其艱内地にあるもの、想像し能はざる所也。夜半遙かに郷を思ふて雁聲に咽ぶの征士なきか。此際宗教家はあらむ限りの力を盡くして、外征の士を慰問するの覺悟なからざるべからず候。

孔夫子傳

世界の三聖と云へば何人も釋迦、基督、孔子に指を屈すべし。孔子は他の三聖と異なりて倫理教を鼓吹して、支那四百餘年の民心を統一したのみならず、併せて我日本思想界にまで其感化を及ぼしたる偉業は、殆乎として千載の後に至るも其徳澤を仰かざるはなし。吾人の最も推稱しておかざる點は、彼の老莊に至るも其徳澤を遠く天に馳せて空想に流るゝにあらずして、其説く所常識的倫理的にして人道の大義を啓發したるにあり。これ孔子の孔子たる所以也。本書は千古の偉人孔子の傳を諸種の方面に互りて、其觀察せる點を擧げて然然たる大冊をなすに至りし者、著者亦勉めたりといふべし。本書によりて獨り孔子の傳を詳にするを得るのみならず、孔子を中心としたる當時の儒教的思想を何ふに於て甚だ裨益する所あり。稍々惜むべきは偉人の面白を抽く所、物足らぬ感を生ずること也。併しなから道徳思想の面目なる今日の社會にありて、本書の出づる吾人の大に喜ぶ所以也。(定價六十錢、文明堂)

白隱禪師傳

禪林の偉人白隱の傳出づ。禪師は近世の大徳として一異彩を放つもの、評者皆て此大徳の生地原野を過て親しく其靈蹟に詣し、其荒廢せる風光に接目して感慨少なからざりき。今禪師の詳傳を見るに及び、目前溫室に接し、坐して其徳音を聞くの思あり。禪師逝きて一百五十年獨り禪門と云はず、各派各宗又一人の偉人あるなし。禪師少壯時代より苦心慘憺或時は夜を徹して法華經を讀み、或時は天神經を習ひ、毎夜丑時より起き燒香作禮して出離解脱を祈りぬ。或時は普門品を讀みて其妙力を験さんとて、火鐵の鑊を股の上に加へし事もありき。其堅忍不拔精神を鍛鍊して修養の久しき其人格を陶冶し來つて、渾然たる白玉を結晶するに至りたり。近時修養を口にするもの豈少しく省みずして可ならんや。肉を口にし、要を帶し、滔々として奈落の底に沈む戒律の俗僧輩禪師の傳を讀まば只それ齷齪死あるのみ。聊所感述べて評語に代ふ。(定價四十五錢、文明堂發行)

帝國文學

これ小泉八雲氏の紀念祭也、全紙面悉く同氏の略歴、逸事、著書、書簡等あらゆる多岐多面に互りて、遺憾なく網羅して來りて同氏の才氣、學力、人格等彷彿の間に認むるを得べし。蓋し帝國文學は同氏を紹介するに於て適當の地位にあるもの。吾人は學界の美事として其勞を多とするなり。(定價二十五錢、大日本圖書株式會社)

御傳鈔講話

親鸞聖人傳

文學博士 南條 文雄述  
住田 智 見述  
平易にしてありかつ書きなしたるもの、施木用として恰好の書也。(三錢、東鳴家庭社)

●殊に恤兵事業の如きは眞個に宗教家の爲すべき適當の務に候はずや。由來宗教家は口の人にして手の人にあらずるは、吾人の大に遺憾とする所なり。國家危急の秋にあたりて飽食暖衣、手を拱して傍觀するが如きは、宗教家として最も耻づべき事と存候。

●厦門にては大谷派教堂破壊の事件相起り候。今後の成行果して如何、氣遣はしく候。

●清國寺院大谷派に所屬を申入れたりと事なるが。之に依りて徴するも、支那佛教の命脈は僅に一縷の餘喘を保つものと云ふべく候。

◎求道學舎の日曜講話如左候。

- 讀維摩經 (十一月十三日午前九時) 曾我 重 深 近角常觀
- 人生の調和 (全上) 近角常觀
- 親鸞聖人の平等主義 (十一月廿日) 近角常觀
- 喜愛心 (十一月廿七日) 近角常觀
- 夫婦論 (十二月四日) 佐々木月樵
- 佛陀の稱賛と證誠 (全上) 近角常觀
- 義なきを義とす 近角常觀

◎近角常觀氏は此度八十鳥さく子と目出度華燭の典を擧げ候。

◎『信仰生活』は愈出版致候。序文は近角學士の信仰生活に關する長々しきものにして、以て大に卷頭を飾るに足る。表紙は博物館技手某氏の意匠に成るもの、蕭洒として愛すべく題字は清國人某の揮毫に候。

◎第二求道會講話記事

○十一月五日 第廿七日 佐々木月樵

○信仰談 善導大師の二河白道の譬諭及びダンテの神曲とを對照して信仰の經過の東西期せずして相類似せる事を最も詳細に談べられたり。即ち水火二河の間を通る僅かに四五寸の狹路に孤立せる人ありて兩岸已に水火の禍に遇ひ、而して又前後に群賊惡獸の難を受け進退最窮れるに、此人苦心進んで止まざりしかば、忽前後に聲ありて、前なるものは呼んで曰く汝一心正念直來我能護汝と、後なるものは教へて曰く汝は彼の言に従ひ進め必ず難なしと、此人聲に應じて進み遂に安樂歡喜の天地に到達するを得たり、ダンテのフランテエスカ又之れと類す、彼の淨罪界にて淨める罪は此人初めに額にDの字を印せらるゝ事七處、而して罪淨まるに從ひてP字は消され遂に悉く消さるゝに及んで神の御聲を聞き、驕、邪、瞋、貪、の罪障全く癒されて平安の境に出たり、前者は善導の實験、後者はダンテの實験歟相共に味ふべきものなりと。當時聽者約三十有五名

○十一月十二日

當日信仰談話會を開くべかりしも講師の事情の爲に催す事を得ざりき一言特に、れが爲に參聽せられし諸君に謝す。

○十一月十九日 第廿八回 近角常觀

當日俱樂部報恩講の執行あり開場差支の爲め休會

○感謝は信仰の反射也 先づ信仰の方より説き及ぼして感謝の方面に入り茲に華嚴經に説かれたる阿闍世王の實験を談せられ感謝は全く信仰の反射なる事を談せらる。阿闍世王一度提婆の教唆する處となり遂に父王を弑逆し重れて母后を幽閉す、然るに後心に悔戀を生じ爲に全體に瘡を生じ懊惱憂苦日夜斷ゆるの暇なし、諸大臣爲に來りて互に慰諭せしめ悔懼徒らに増すあるのみ。最後に提婆大臣あり王に問ふて曰く大王能く睡るや否や王答へて曰く無上の大醫と雖とも尙能く我病苦を癒する能はずと、提婆更に曰く大王憂ふる事勿れ、今是を救ふの過二つあり、一は慚一は愧、而して大王今正に慚愧あり、大王願くは已れより佛に會ひ給ひて法を聞かるべしと大王其言に従ひ釋尊の下に至り遂に大安慰を得たり、是に於て王釋尊に言て曰く我世間を見るに伊闍子より伊闍樹を生ず伊闍より梅檀樹を生ずるものを見ず、我今始めて伊闍の子より梅檀樹を生ずるを見たり、伊闍子は我身是

◎佛上人の近作を左に 紺足袋の女も冬の初めかな

◎第一卷第一號より第十一號に至る總目錄は來る一月の第二卷第一號の附録として、讀者諸君に分つべく候。右御承知願上置候。先は如例御報道まで、年内幾日も無し、慈光の下恙なく越年せられむこと切望の至に候。

傍 聽

求道學舎

每日 曜 午前九時より本郷森川町一番地に於て

傍 聽

第二求道會

毎土曜 日午後二時より九段佛敎俱樂部に於てあります

◎正誤 閑文字(第一)の五行目「車中ふと出て」は「車中ふと思ひ出て」の誤

なり、梅檀樹とは即是我心無根の信也と、我等も信仰を得て後に首を回らして見れば過去の事は總て皆我等をして茲に至らしむる偉大なる佛陀の御導なりけりと自ら感謝の涙に咽ぶのみなり。

○十一月廿六日 近角常觀

○報恩の至情

○大意 この頃は親鸞聖人の信仰を傳へる人々が各地に於て聖人遷化の昔を思ひ報恩の誠を致す時節柄である蓋し眞の報恩感謝の至情や絕對佛陀に對する信仰の泉より湧き出づ吾人の思ふ事爲す事一として善なるものなくたとひ善き事を爲すも皆是雜毒虛假の善行なれば積極安慰の境に入るを得ざる也一度萬事を放下して仰いて佛陀の慈愛に接すれば又善惡の憂を要せず胸中湧き來るものは唯是感謝の至情なり報恩の至誠なり見るとして悦ばざるなく聞くとして快ならざるなし不可思議の諸縁と言ふべし人生の生活これより感謝の生活となり偉大なる慈愛最切なるを感ず信仰なき生活は危憂の生活なり信仰的生活は感謝の生活なり至誠の生活なり常に回首して偉大なる絕對佛陀の慈愛に感激しつゝこの人生の本務を盡すべき也當日聽衆五十五名

◎絶対の戒律

先夜は長時變話、熱烈なる信仰の火に燃せられ、今に餘香を留め居る様被感候、所詮は此のものに依りて、自他を融會し、佛神と冥合するの外に、道といふ道は無之ことと存候。たゞ吾人凡夫地の境涯として尙更、信仰の對照如何によりて、眞理の淺深、及び其の契否すら可有之様被考候。御同様深く、留念可致度と恐信罷在候。惟へば八宗九宗十何宗の祖師方いづれおるか被爲在問數候得共貴ぶべきは時空を絶して一過直ちに大覺の獅子座下に金口の親教を聽き得たる人天師に有之。斯くて人即法、所謂法身の消息を疎現したる根底には、必らず戒定慧三學の融會なかるべからざるは今更のことには無之。隨て戒節を超越せる戒律とは、無戒無律を意味するにあらず、必らずしも戒其のもの既に行者の心身に遍滿して、所謂戒體を得得して、行住坐臥任運に戒なるの眞境を云ひ顯はしたるものと信ず候。元來因果の理法を離れて、宇宙の森羅萬象なく、而して森羅萬象即ち畜の天に飛び魚の水に跳る、既に無文の戒律なれば、戒律に循據し戒律と冥契



し、即ち戒體發得の上の坐作進退、任運無功用に眞理なるの上境をこそ、戒を超越せる戒と云ふべけれ。而かも戒を出て無戒と爲るにあらず、行者の身心即ち戒の學體たるに外ならず。余が欲光慈雲尊者の偉大光明に感通し歸投する。尊者の一句一偈若くは學手動足の跡悉く遺棄の消息を冥示しつゝあるが爲めなるに外ならず候。言ひ換ふれば、尊者の學手動足、任運に戒定慧の光明を發揮しつゝあるに感通し、此の光明に依りて法に入り、法を鉢現せんと欣求精進し、併せて現代有縁の一切に此の光明を普週ならしめむと欲する次第に候。『求道』の御高説の『信仰と戒律』に對する所感も、尊者に對する信念歸投の表白も、略此の如くに候、不日推參更に委細の專見も申述度候。

露門生

◎閑文字 (二)

加賀金澤市の町はづれ、淺野川の清き流れ煩悩を洗ふこなた松栢齋法の聲を含む處に一大伽藍あり、天徳院是也、春くれば櫻花繽紛としてみ佛の徳をたへ、秋くれば月皎々として不斲の燈をかゝぐ、住職押野太壽師は濁世の今日に見難き高德也、一度師に謁するものは其徳風に化せられて天地の大靈自ら感通し來るを覺ゆ。

器に曰く人を愛するものは其屋上の鳥に及ぶと師や實に其人也。

師小兒の玩具を好むこと甚し、達摩禪助の類果然として床上に並べられ師見て以て樂みとす。天真爛漫たるところ小兒に似たらずや。

文學士常盤大定纂

佛陀之聖訓

〔全一冊、クロス、金字入、二百十頁餘、製本、印刷精選〕

◎一冊特別減價三十錢◎郵税四錢

世人の佛敎に意あるもの簡潔明了なる著の出つる待や久しく其聲や大なり。而も未だ之に應ずるもの甚た少なきを憾とす。本書は東京市養育院幹事の求により、同院敎海の講本に備へんため留意纂修せるものにして、金言の間に譬喩を交へ、且つ實例を加へたるを以て其趣味深く。殊に懇篤に和譯せられたるを以て、如何な婦女兒童にても了解するに難からず。各種の佛敎團體、婦人敎會、兒童敎誨の講本に適せるは勿論、苟も佛敎の大要を知らむとするものに取りては無上の好著なり。希は一本を座右に備へ修養に資せられむことを望む。

發行所

東京小石川白

無我山房

取次所

本郷森川町一番地

求道發行所



文學士 近角常觀序  
百日本劍虹著

(十二月廿日發賣)

# 信仰生活

補珍美本  
定價貳拾錢  
郵稅貳錢

人生は闇なり迷なり迷なるゆゑそこに悟あり闇なるゆゑそこに光を見るにあらざや吾等は迷ひつゝ悟る也悟りつゝ悩むもの也迷悟もと二あるにあらざ煩悩菩提一なりと知らずやこれ宗教的經驗を経たるものにあらざんば個中の眞味を語るに足らざる也  
『信仰生活』の一篇正さに是也實驗の土は底深く穿かたれぬ懺悔の泉は清らか也苟も信仰の渴を醫せむとするもの來りて清泉の流を汲め

發兌元  
賣捌所

東京市本郷四丁目五番地  
東京市本郷森川町一番地

文明堂  
求道發行所

會長(精神靈)桑原天然總理 (會則要) (郵券貳錢)

雜誌 精神

東條金參拾錢(前納)  
會費每月金拾錢(前納)  
(半ヶ年前金六拾錢)  
(壹ヶ年前金壹圓拾錢)

右會員ニ限リ配付ス(何時ニテモ入會ヲ許ス)

明治三十八年一月初號發刊即時發送

東京市麴町區 壹番町拾四番地 精神學會

文學博士 南條文雄師述

## 御傳鈔講話

第一編  
好評噴々  
再版出來  
▲一部三錢郵稅二錢  
▲五百部以上二錢五厘宛郵稅別  
▲千部以上特待法あり照會あれ  
住田智見師述 (十一月二十日發行)

## 親鸞聖人小傳

▲定價同前 ▲訂裁類美

發行所 東京巢鴨 二二五五 家庭社

### 文書傳道會趣意書

戰以外に勝つも、邪道世に行はれて、人の心迷ひ腐りなれば、國家恐らくは亡びむ。今や怖ろしき激戰、いたましき死傷によつて、心の慰安を求め、靈の濟ひを喚ぶの聲、天下に滿つり。眞に是れ佛陀の大悲を傳へて、世を救ひ人を導くべきの時也。思ふに人を教へ道を傳ふるに、その方法甚だ多けれど、最も便益なりとす。見よ、基督教には、いかに文書傳道を努めて大なる効果を收めつゝあるかを。余輩亦此に感ずる所ある久し。曩に日露の戰端開くや、盛に書冊に由りて、軍氣の鼓舞に、遺族の慰めに、傷病兵の慰めに、聊か盡す所ありしが、幸に佛天の加祐により、意外の好結果を獲たり。由つて此に有志相謀りて、佛の爲めに、佛の爲めに、佛の爲めに、世を愛ひ人を憐れむの心ある者、冀くは來り援けよ。

#### 文書傳道會略則

- 一。本會は善く有志の賛同を得、施本によつて、布教傳道の目的を達せんとす。
- 二。本會の趣意を賛同し、常に施本を布教せんとする者を會員とし、分ちて正會員、特別會員、賛助會員の三種とす。
- 三。正會員は、毎年金拾八錢宛を前納する者にして、本會より毎月發送する傳道用冊子(法の寶)を受け、之を自ら讀みたりて後、直に他に施し與ふべきものとす。但し正會員にして本會傳道用冊子を多く施せんとする時は、便宜引法を以て其額に應ずべし。
- 四。特別會員は、廣く施本を布教を行はんとす。一時に金壹圓以上を前納し置く者にして、本會は毎月小冊子を發送し、且つ何時にても其要求に應じて、前納金額に對する冊子を漸次に發送すべし。且つ本會傳道用冊子を、一時に施せる者も、其功勞ある者、及び傳道基金として、一時若くは數回に金圓を喜捨する者も、本會の特別會員とす。永く本會の優待を受けるものとす。
- 五。本會の事業に効勞する者、及ぶ傳道基金として、一時若くは數回に金圓を喜捨する者も、本會の特別會員とす。永く本會の優待を受けるものとす。
- 六。正會員百名以上を得たる地方には、本會の支部を置くことを得。
- 七。本會は諸名家の寄稿を乞ひ、布教傳道に適切有益なる書冊を發行すべし。
- 八。本會は經濟的の許す限り、直接に施本を布教に企て、又會員の指名囑托に應じて、本會の傳道員若くは名を置く、事務を協賛し、會計を監査せしめ、外に司計書記を置く。
- 九。本會の細則は別に之を定む。
- 十。本會の細則は別に之を定む。

申込所 京都市間之町通上珠數屋町下ル 文書傳道會

文學士 清澤滿之師序  
文學士 近角常觀君著

訂正 第五版  
增補

# 信仰の餘瀝

全

●上製二十五錢●郵税二錢●郵券代用一割増(並製買切)

本書は、著者が活火炎々たる自家の信念を告白したるものにして、活ける懺悔靈感の妙趣此中に存せざるはなし、其説く所卑近に流れず、高遠に失せず、平易の裡、紛糾錯雜せる人生問題、を捉へ來りて、よく之を調理し、少しも生硬の憂なく、讀者をして、憂然胸中秘奥の琴線に觸れしむるものあるを覺えしむ。  
漸々版を重ねるに臨みて、著者自ら筆を執りて、或部分の如きは全く改竄するまでに、嚴密なる訂正を施しぬ。添うるに森嚴なる筆を以て自序をも、のし之を卷首に題し、且つ滯歐中日拜夕讀したる聖經に就ての所感一篇を附録とせり。句々皆金石の聲を發せざるはなく、字々悉く熱淚の痕たらざるはなし、苦悶の闇にある人、信仰の飢に叫ぶの士、來りて本書を繙けよ、光明界の指導者たるもの、それ必ず此書ならむ。

發行所 求道發行所  
東京市本郷區森川町一

## 規定

- 一、本誌は毎月一回(一日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
- 一、但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて中送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
- 一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一、本誌定價左の如し

|     |     |      |       |      |
|-----|-----|------|-------|------|
| 一部  | 一ヶ月 | 六ヶ月  | 一年    | 郵税一冊 |
| 金拾錢 | 金拾錢 | 金六拾錢 | 金壹圓拾錢 | に付五厘 |

- 廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢
- 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
- 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治三十七年十一月三十日印刷  
明治三十七年十二月一日發行

發行所 求道發行所  
東京市本郷區森川町一番地  
(電話下谷二四三三)

大賣捌所 東京市神田區神保町  
同 本郷四丁目 東 京 堂  
同 文 明 堂

16-38

薪に火をいつれば離るゝとなし。  
薪は行者の心にたどふ。火は彌陀の  
攝取不捨の光明にたどふるなり。心  
光に照護せられたてまつりぬれば、  
我心をはなれて佛心もなく、佛心  
はなれて我心もなきものなり。これ  
を南無阿彌陀佛とはなつたり。

(安心決定鈔末)

